

## はみ出し者の香りは如何？

彼女はこれが悪夢なのか、それとも悪い現実なのか、判然とせずにいる。自分の身に降りかかっていることに現実感を喪失していた。

まるで高熱でうなされた時のように目の前の事象が歪んで見えるのは、何が起きているか理解が追いついていないからだ。心拍だけが激しくなるのに対し体はその場に座しているのは手足の自由が奪われているからだ。

制服を着崩した長髪の少女が仲間と何やら話し合い、邪悪な笑顔でこちらへ迫ってきた時、混線状態の頭の中に確固とした恐怖が大きく主張を始めた。そこでようやく彼女は結論を出した。

ああ、これが悪夢なら良かったのに。

「はいじゃあ何かアイデアのある人―」

花の高校二年生、桜庭さくらば友香梨ゆかりは、教壇に立ってクラスメイトの顔を見渡した。

間近に迫る文化祭のために行われていたクラスの出し物についての会議は、学級委員長の進行の元和気あいあいとした空気で進められた。もともと活気のあるクラスではあった

が、今時学祭で積極的に話し合う高校生というのも珍しいのかもしれない。それも一重に友香梨の手腕と人柄あったものと言っても差し支えなかった。

彼女にはいわゆるカリスマ性があつた。男女関係なく氣さくに接しよく氣が利き、ユーモアがあり常に笑顔を振りまく姿から、同級生はもとより先輩・後輩からも人氣を寄せていた。またその人柄に加え誠実で努力家な一面が成績にも如実に反映されていることには当然教師の評価も高い。彼女は多くの者から信賴されていたのである。担任教師に生徒会にも誘われたこともあるが、自分には相応しくないということでも学級委員になることと交換条件で断っており、その結果今クラス全員の目線を一手に引き受けているのだった。

そんな彼女のおかげか、議論は順調に進行していった。が、彼女は少し真面目過ぎたのかもしれない。友香梨はある一人の生徒に目を向けた。

「ちよつと愛美さん話聞いてる？」

「……ああ？」

愛美と呼ばれた女子生徒は一瞬焦った表情をしたかと思うと、いかにも不機嫌そうに桜庭を睨み据えた。

彼女は北條 愛美。胸元を緩めて制服を着崩したその恰好から察せるとおり真面目な生徒ではなく、クラスの問題児

の一人であった。彼女の家庭は裕福であったが親が仕事で忙しく、ありがちな話ではあるが愛のない環境からか不良気質を持ってしまった。

そんな彼女がこの議論に真剣に参加するはずがないことは周りの多くの人物同様友香梨も察していたが、その誠実さと委員長としての使命感から、愛美に声をかけたのだ。

「できれば多数決の時くらい手を挙げてくれるとありがたいんだけどなあ」

「うつせえなあ……」

愛美は小さく舌打ちをかまし漏らすように呟いた。

彼女は友香梨を入学当時から嫌っていた。捻くれている愛美からして優等生というだけでも鼻につくの、その真面目君<sup>まじめくん</sup>らしからぬムードメーカーぶりが余計氣にくわなかった。当然友香梨の言うことにまともに従うつもりなどなかった。

「……へいへいわーったよ」

だが友香梨の目が授業中使用禁止のスマホに向いていること、クラスのほとんどが自分に注目していることに気づくと、ばつが悪そうに返事をした。

友香梨はふうとため息をつく、「よろしくね」と微笑みまた話し合いを再開する。彼女にとってはこの一件はこれで

終わったことだったかもしれない。だが愛美にとってはそうではない。火種とは小さく気づきにくいものであることが世の常なのだ。

数日後から文化祭へ向けての準備は本格的にスタートした。放課後には部活動の喧騒の代わりに出し物等の制作で賑わう声が木霊する。だが往々にして文化祭嫌いという者は存在する。

当然ながら愛美も青春ごっこよろしく楽しそうに働く他のクラスメイトを、何が面白いのかと言いたげな目で冷やかに見つめていた。

「あークソめんどくせー、帰ってー」

教室の隅でつまらなそうに壁にもたれて座りながら愛美は不満をもらした。彼女は同様にサボる悪友達と何をするでもなくとりとめもない会話を交わしていた。

放課後の活動自体は強制では無かった。だがクラスの担任教諭が帰ろうとした彼女たちを呼び止め活動に参加するよう釘を刺し、他の生徒にも彼女らがサボらないか見張るよう言い残していた。

だがサボっていて注意されるようなことはほばない。あつても一言注意されるくらいがいいところだ。大抵の生徒が愛

美とは深く関わりたくないからだ。

「別にウチらいなくても変わんないのにねー、真面目にするわけないのにさー」

彼女の近くで同じようにサボる二人の内ポニーテールでやや幼さが顔に残る少女、ふくしたるいず福下 瑠慰好が悪戯な笑みで愛美に答えた。

彼女はいわゆるキラキラネームというやつだ。本人がそれを気にしている様子はあまり見受けられない。明るく活があり女の子らしさもある人物だが、格式ばったことが苦手で関心のないことには見向きもしない、自分が面白ければよいというのが彼女のスタンスであった。そのためか学校生活では不真面目ところも多く、愛美の刺激的な言動に変な魅力を感じたため彼女たちは出会った。

「やっぱり帰ろっか？」

「つつても高橋にチクられてもメンドーだろ」

「まーこんな風に強制されたの初めてだしねー、日ごろの行いのせいだろうけどさ」

高橋とは彼女たちの担任である。桜庭を生徒会に誘ったのも彼であり、当然鼻肩している。それも愛美にとっては気に障った。

「んじやさ、脅しちゃえばいいじゃんチクんなよって、ま

なみっち目つき悪いしガン飛ばしたらみんなビビるでしょ」

「うっせーわバカ」

少女は頭の後ろで手を組んでニシシと笑い茶化した。愛美は彼女を左手で小突く。

しかし実際クラス内で彼女は多少なり恐れられていたのも事実である。人当たりが悪く、過去にいじめなどをしていた経緯からも評判は芳しく無く、一部の友人以外からは大抵の場合距離を置かれていた。

「まあ確かにそうかも知れないけど、桜庭にばれたらどーせチクられる上に後からうウゼーこと言われそうじゃん」

高橋教諭は特に友香梨に対して愛美達のことを任せたようだ。というのも文化祭の実行委員を指揮せねばならないからである。

今友香梨は教室には居らず別の作業をしているが、戻ってきて居ないことがばれば色々面倒な事態になる可能性は十分にあった。

「あーゆかりんねー……カタブツって訳じゃないけどそういうところあるよねー」

「そのくせ無駄に人気あっていつもニヤニヤしてんのが余計腹立つわ」

「小学校から一緒だけどウチもちよっと苦手だなー。悪い

奴じゃないんだけどさ、なんかイラっとくるんだよねー。最近はいい気になってリーダー風？吹かせてるとこもあるし」このクラスに友香梨の幼馴染は多かったが、愛美を始めとして高校からの付き合いの者もそれなりにいた。

「ほんとあいつムカつくよな。こないだの話し合いの時だって周りの目があるからって調子乗りやがって……ぜってーアタシのこと見下してるぞ」

「まーそれもあるけど、ウチはなによりも男子の目線がみんなゆかりんに向ってんのがむかつく！独り占め反対！」  
溜慰好は割と本気で悔しそうに眉をひそめた。彼女はとも乙女的な思考を持っているようだった。

「いや、それは別に……」

「まったく、絶対そついう嫉妬あるでしょ！まなみっちだってほんとは男子意識してるの知ってるよ？」

「そ、そんなわけあるか！」

「ムキになっちゃって分かりやすいな」

「このやろうシバくぞ」

「アハハ、ごめんごめん」

思わず立ち上がった愛美の桃色の耳を見て溜慰好は再びニシシと笑う。

実際愛美も不良である前に一人の女の子であることも確

かであった。いつか彼氏が……などという甘酸っぱい感情は  
瑠恵好だけでなく彼女も有しているのである。それが輪をか  
けて友香梨への妬み材料となっていた。

「すずっちはゆかりんのことどう思う？」

瑠恵好は隣の窓辺でスマホを弄る女子の顔を覗き込んで  
声をかけた。

「別にどうとも」

浅黒い肌にショートカットのために、ボーイッシュな風貌  
はるなみ すず  
の春波 錫は視線を下げたまま落ち着いた声で返事をした。

「まあ錫はあいつに興味なさそうだもんな」

愛美はわかってたという風に目を細めて笑い、再び腰を下  
ろす。錫が周囲に、とりわけ人間関係にあまり頓着がないの  
はよく知っていた。

「もーノリわるいぞすずっちー！」

瑠恵好が横から錫に抱き着き揺さぶるが、錫が趣味として  
いる筋トレのお陰か非常に体幹がしっかりしているため、彼  
女の体はわずかに左右にぶれるだけである。

「うわーすずっち腕力チカチだねえ……っあれ、ちょっと  
待って……スンスン」

筋肉に感心しつつ何か気づいた瑠恵好が錫の側頭部あ  
たりに顔を近づけて鼻を鳴らす。



「うわくさ！くっさいよすずち！またお風呂入らなかったでしょ！」

「まだ二日しか抜いてないし」

顔をしかめ鼻を摘まんでのけぞる瑠恵好と対照的に、錫は顔色一切変えずに呟く。

「いや十分不潔だよ！なんで入んないの！」

「風呂とか時間の無駄。その分勉強とか運動してたほうが有意義でしょ」

「時々思うけどすずちってバカなの？」

「成績は瑠恵好よりずっと上だけど」

「いやそういうことじゃないでしょ！」

確かに錫はクラスの中でもテスト順位が毎回5位以内に入るほどには頭は良かった。現在つるんでいるメンバーの中では唯一部活にも入っており生活態度も悪くなく、一見すると他二人からは浮いた存在にも見える。

だが、清潔感に関心を欠いていることを始めどこかズレている人物であり、優等生の典型に当てはまる人間ではない。そのためなのか、なんやかんやで愛美達不良娘と気が合いよろしくやっているというのが現状であった。

「こいつ陸上やってる上に汗かきだからなー。しかも偏食家だし体臭もあるだろうな」

愛美がニヤつきながら瑠慰好を横目にそう言った。

「そーいやいつも肉ばっか食べてるし飲み物も大抵牛乳だよね」

「肉も牛乳も美味しい上に筋肉がつくから合理的」

「考えてるようで考えてないような……というか肉ならなんでもいいってわけじゃないんじゃないの？」

「細かいことは気にしない」

「やっぱりバカでしょすずっち」

瑠慰好は呆れた様に笑った。

「臭いと思い出したけどよ、こいつ屁もヤベーんだよ、一回隣でこかれた時やばかったぞ、死ぬかと思った」

愛美はいつぞやのトラウマを思い起こし顔が青くなる。

「うわあ……ちよっとすずっち今出さないでよね」

「……」

「え、嘘だよな？ちよ、ちよっと？」

「……セーフ」

「うええ！マジで出そうだったの！？」

「いや冗談だろ？そうじゃなかったら先に言えよお前マジで」

本気で慌てふためく二人を見て、錫はにやりと微笑んだ。

「大丈夫、出そうなのはほんとだけど人前では大抵我慢し

てるから」

「じゃあなんでアタシがいた時にしたんだよテーマは！」

「愛美なら問題ないと思って」

「お、お前なあ！」

三人が教室の隅でぐだぐだやっていると、教室後方の扉が勢いよく開け放たれる。扉近くの生徒はビクリと肩を竦め、賑やかだったクラスの視線が一瞬扉の方に集まる。その目線をすぐに逸らした者も、そのまま注視し続ける者も、共通して嫌悪感を表わしていた。

「愛美ー、いるかー！」

扉を開けた少女はクラス内を一瞥すると、すぐに愛美達を見つけずかかと歩を進める。他の生徒が横目でヒソヒソと悪態をつくのを知ってか知らずか我が物顔で部屋を堂々と闊歩する。

「ちっ、うるっせえの来たな」

「んだとコラ」

愛美と笑顔で挨拶を交わしたのは素行の悪さで有名な佐々木香夏<sup>ささき かな</sup>。愛美達とは別クラスであるが、愛美とは昔からの悪友で、染めた髪や耳のピアスからも察せるように典型的な不良少女である。愛美とはかつてといじめやカツアゲ紛いのこともしていた。

「かなっちオッス」

「おいーっすルイズ、スズ」

香夏がジャージに突っ込んでいた手の片方を出して掲げると、溜慰好はペチンとハイタッチし、錫もスマホ片手に手を差し出す。

「何しに来たんだよー」

愛美が気だるそうな目と声で訊ねると、香夏は挙げた手で頭を掻きながら笑いつつ答えた。

「いや今日さ、高峰が休みで暇だから遊びに来たわ」

高峰とは香夏と同クラスのこれまたワル仲間である。香夏がクラスの中では最も気が合う人物であった。

「そんだけかよ……っーか今まで何してたよ」

「別に、小遣い稼ぎだよ。文化祭期間は騒がしくてやりやすいんだよなー」

「またかよ、よく飽きねーな」

香夏はまあな、と言って笑った。最近は大人しくなっている方だが、彼女は高峰などと共に時々クラスメイトや下の学年を呼び出しては金を“借りて”いる。彼女いわく快く借してくれる人物が何人かいるそうだ。

「それより今からカラオケにでも行かね？丁度さつきクーポン手に入ったんだよ」

ポケットから取り出したくしゃくしゃの紙をひらひらと振りながら愛美達に目配せする。

「お前それって……まあいいや」

出どころが丸わかりなそれを見て、愛美は呆れたように笑った。

「ウチらも行きたいのはやまやまなんだけどちよっとね——」

溜慰好が大げさに腕を組み首を傾げた。

「なんかあんの？」

「いやなんにも、行こう」

愛美は小さく笑うと、床に手をつき立ち上がった。

「あれ、まなみっち行くの？」

「いや、なんかもういいだろ？ここにいてもつまんねーしめんどいの帰ってくる前に行くわ。お前らは？」

香夏の傍若無人っぷりを改めて認識した愛美は、おとなしく人の言うことに従っている状況がどうにも馬鹿らしくなってしまった。口封じして帰ってしまえば後で言い訳などとうにでもなる。現行犯で教師につかまらなければそれでよしだった。

「もちろんまなみっちが行くならウチも行くよー！赤信号もみんなで渡れば怖くないってね」

「なんか違う気もするが……錫は？」

「ん、行く」

全員が賛成し、各々が帰り支度を始める。こういう時に行動するパワーを与えてくれるのが香夏だった。ほとんどが悪い方向にだった。

「おい、ちょっと」

近くにいた男子に声を掛ける。急に話しかけられ少し驚いた様子だった。

「わりい、ちょっと急用できたからアタシら帰るわ。高橋にもそんな感じで言っといてくれ」

「え、いやおかしいだろ。お前らどうせ遊びに行くだけだろ？せめてちょっとぐらい手伝ってから行けよ」

漠然と誰かに伝えればうやむやに出来ると思っていたが、彼は食い下がってきた。このクラスは気の強い者はいないが、彼のように多少勇気のある者もいるのだ。そもそも愛美は別にクラスメイトと話さないわけでもなく、特に男子とは多少の交流もある。

「いやお願い頼むよ、大したことないだろ」

「で、でもなあ」

「おい！てめえなんか文句あんのかコラ、急用だっつってんだろ」

どう捌こうか考えていた愛美の思考を遮って、香夏がドスを効かせた声で男子をけん制した。彼女なりの助け舟であったが、海賊船という表現の方が的確かもしれない。

「う……いや、文句というかさ……」

さしもの彼もすっかり怖気づいて後ずさってしまった。元よりこの教室には喧嘩などしたことのない面子のみなのでむしろ奮闘した方である。

何はともあれ事態が解決したようなので、彼女たちは廊下に出ようとした。だが手遅れだったようだ。

「ちよつと待った！」

「あ、やべ」

つい小声で漏らす愛美。目の前に友香梨がいた。別の作業から戻ってきたところで鉢合わせてしまった。

「あなた達どこ行く気？」

「いや、ちよつと急用でさ」

「そんなわけないでしょ、そんなに大勢で」

「いいじゃんゆかりん今日だけ見逃してよ」

「駄目に決まってるじゃない、溜慰好もいい加減大人になりなよ」

「む……なにその言い方、ム力つく……」

おどけて流そうとした溜慰好だったが、友香梨の一喝に今

まで無いような憤りを感じ気分を害する。

「うるせえなどけよお前」

香夏がまたも割って入る。先の例もあるように、特に女子ならば大抵一睨みもすれば怖気づく。

「ていうか佐々木さん自分のクラスの手伝いはしなくていいの？」

だが今回はそうでないらしい、友香梨は香夏を睨み返した。

「だからなんだよ関係ねーだろ」

「大有りだよ！あなたの先生にはここに來てること報告してるからね」

「は？え？お前いつの間に！」

「つかなんで香夏がいたの知ってたんだよ」

予想外の発言に動揺する香夏の代わりに愛美が質問する。

「さつきここで作業してた人が教えてくれたの、だから戻ってきたし」

やられた。愛美は苦い顔をした。教室から密告者が出ていたのだ。大方香夏が来て空気がピリついたからだろう。つまりそれは彼女達がろくに働いてないことも筒抜けだということだ。

「とにかく、サボらないでしっかり働いてよ」

「そうだぞお前らちゃんとやれ」



「みんな真面目にやってるんだよ！」

「す、少しくらいは手伝ってよ」

友香梨の言葉に先の男子が続くと、そうだそうだと他の生徒も後に続き、クラスメイトの多くがその流れに乗り始めた。

「……ったく、胸糞わりいな……分かったよ手伝えばいいんだろ」

愛美は一度何か抑えるように拳を強く握ると、小さく悪態をつきぶつきらぼうに返事をした。

「こんなやつら無視でいいだろさっさと行こうぜ！」

香夏が苛立った声で愛美に言うが、すぐ後によく響く声が彼女に降りかかった。

「おい！佐々木！何やってんだ教室戻れ！」

「うっ、あーちくしょう……」

クラスの副担である体育教師が香夏を呼びに来たのだ。

実のところ、現代では珍しいくらいの熱血指導をする彼目があるので香夏は最近目立った行動を自粛していた。そもそも内申点などの問題もあるため教師には容易に逆らえないのが実情である。

「他のクラスにまで迷惑かけてんじゃないぞ！」

「あーはいはい分かったよ！」

「さっさと戻れよ」

「最悪……愛美わりい後でまた会おうぜ」

「ん、ラインするわ」

香夏は教師の背中に舌打ちしするとそう告げ、冷やかな目線をくぐりながら不機嫌そうな足音を響かせその場を後にした。

「さーあなた達もやることやる!」

「わかってるようっせーな」

「感じワルー」

「いやあなた達が悪いんでしょ」

愛美達の恨み節を一蹴すると、友香梨は目を錫に向けた。

「もしかして、錫さんも帰ろうとしてたの?」

困惑気味の表情で質問され、錫は悪気もないといった顔でこくりと頷いた。

「ちよつとーやめてよ、錫さんそういうの止めてくれると思ってたのにー」

そういいながら友香梨は苦笑いして錫の方に寄っていく。友香梨は錫とは特に親しくもなくたまに話す程度だが、成績優秀であるがために愛美達とつるんでいても不真面目なイメージは持っていないようだった。

「んくっ!?!……けほっ」

すると急に友香梨が小さくせき込む。一瞬のことだったが

錫はそれに気づいた。

「どうしたの」

「え？あ、なんでもないよ！それより頼むよ、この人たち止められるのあなたぐらいなんだからさ」

「……」

「ほらほら作業に戻った」

友香梨が促し愛美達は渋々戻り、放課後の時間を予定通り潰すことになった。

時間は流れ、上から滲んできた夕闇がその深みややを増す。だが自然の作り出す影など現代の高校生にはあまり関係がなかった。特に先ほどカラオケボックスに入った彼女達にとっては。

「くそー無駄な時間食っちゃったよ」

香夏はまだ機嫌が悪かった。彼女だけではない、錫のいつも通りのポーカークフェイスを除けばあまり乗り気な表情はしていない。とりあえず来てはみたが、歌うのもそこそこにカラオケルームでだらだらと過ごしていた。

「もーなんか疲れたよねー」

溜慰好が口を尖らせる。実際彼女たちは大したことはしていないのだが、フラストレーションが溜まっているようだった。

た。話題は自然と放課後のことへと移る。集合直後もしばらく愚痴ったことだったが、こういった話題は得てしてひと段落すると再び火が付く。

「あんなことやってなけりやもう少し気持ちよく色々遊べたのにさー」

瑠慰好はドリンクにストロー越しに息を吹き込む。彼女の不満が泡となりブクブクと音を立てて主張する。

「ほんとそれな。それもこれもあの糞女のせいだよ」

香夏はだらしなく脚を広げソファに深く沈みながら言い放った。

「ウチも今回はほんとにイラッと来たなー、ゆかりんのやつ何様のつもりだったっの」

大人になれ。この言葉を仮にも幼馴染から言われたことに瑠慰好は自分でも驚くほどに頭に來ていた。

「まなみっちはどう思う?」

「……いや、アタシも割とマジでキレてるよ」

「やっぱりそっかー、てかみんなしてあんな風に一斉攻撃することないよね」

「……ちっ」

舌打ちする愛美にとって最も腹立たしかったのはそこだった。彼女は先刻のことを脳内でリピートし、奥歯を噛んだ。

彼女が友香梨を気に入らなかったのは劣等感やある意味での羨望からだった。自分では自由気ままに生きているはずなのに、友香梨の方が輝いて見えるのが悔しかった。愛されることが少なかった愛美にとって彼女の人気は嫉妬の燃料にしかならなかった。押し殺して気づかぬふりをしていたその感情が今回のことで浮き彫りになり、今彼女はそのエネルギーのやり場を求めている。

「あーマジぶん殴りてえ！なあもういつそのこと囲んでやっちまわねーか？」

「い、いや流石にそれはまずいでしょ……かなっちはともかくウチそういうの苦手だしバレたらやばいし」

香夏の直球過ぎる提案に溜慰好がしっかりとツッコむ。

「でも何か思い知らせてやりてーよな」

「んー、まあね」

愛美も香夏ほどではないが血の気は多い。何かしらのアクションを起こすつもりはあった。

しかし確かに暴力を振るって怪我でもさせると足が付き兼ねず、その場合問題も大きくなる。地味ないじめをするのも今回に関してはまどろっこしかった。そもそも、友香梨がそのようなことに屈する人間ではないことは知っていた。いじめや暴力に負けない程度には強い人物であるのだ。

皆行き場がないからか、少しの間黙り込んでしまった。一人を除いては。

「……あのさあ、すずっちもなんかないわけー？」

溜慰好がジトつとした目で錫を睨む。黙々とフライドポテトを口に運ぶ錫を。

「今忙しいから」

「ええ……すずっちはゆかりんにムカつい……てなさそうだね、全然そんな風じゃないし」

溜慰好がそうやって小さく笑うと、錫は一度ポテトに伸びる手を止めた。

「そんなことないよ、私も怒ってる」

「えっ、あ、そうなの！？」

「錫にしちゃ珍しいな、何が腹立つんだ」

意外そうに驚く彼女たちの顔を横目に錫はまたポテトをパクパクと食べ始める。

「ひんあをおほらへははら」

「は？なに？あんだって？」

もごもごと喋る錫に溜慰好が聞き直す。錫はごくんとのを鳴らした。

「レッテル張りするから」

「レッテル？」

今度は愛美が聞き返す。

「うん、あの人私を勝手に優等生だって。そういうレッテル張る人嫌い」

「え、でも今絶対違うこと言っただっしよ、ほんとは何て言っただの」

「違うと思うならそれでいいよ」

「えーなんだよー」

「今忙しい」

三度手と口を動かす錫をみて、溜慰好は聞くのを諦めた。

彼女がレッテルを張る人間が嫌いなのは本当だった。友香梨のまるで自分を全部知っているかのような口振り、成績がいいから真面目だともいうような言葉。錫は表層だけで決めつける人間が好きではなかった。愛美達も自分のことを完全に理解してくれているわけではないが、少なくとも自分を知ってくれようとし、素の自分と向き合ってくれた。錫は彼女たちといると気が楽だった。楽しかった。

だからこそ彼女は言った。『皆を怒らせたから』と。愛美達を否定した友香梨を、錫は否定した。もちろん愛美達は批判されてもおかしくない。擁護する必要もない。だけどそんなことは錫には関係ない。彼女は不良と言われようがどうだろうが愛美達が好きだった。

「すずっちそんなにお腹空いてんの？」

「そこそこ」

それはともかくとして錫はポテトを食べ続けた。まず何よりも食べるのが好きなのである。

「それ全部食べる気？」

「……いる？」

「いやいらんけどさ」

「くそ、お前少しは気いつかえよなあ！」

さつきから黙っていた人が腹を抑えてうずくまりながら口を開く。溜まっている唾がこぼれないようにしながら。

「かなっちお腹空いてんの？食べればいいじゃん」

「いやなんというか、家で飯食えなくなるから、というか、くう……」

「そーいやお前ダイエット中なんだっけな」

悶絶しつつごまかそうとする香夏に遠慮なく愛美は言った。

「あー！てめ、言うなやボケ！」

「へーそうなんだ、意外とかわいいとこあんじゃん」

「うるっせーないだろ別に！」

にやにやとこちらを見る瑠慰好に、香夏は顔を赤くして怒鳴る。幸いここはカラオケボックスなので問題はない。



「そんなに必死にダイエットしてんの？」

「こ、こちとら昼抜いてんだよ、なのに目の前でバクバク食いやがって」

「へー、じゃあ辛いわけだね……ほれほれ」

「ホクホクでうまい」

瑠慰好が意地悪く目の前でポテトをプラプラと振り、錫がとってつけたように感想を述べる。

「この、他人事だと思いやがって……」

香夏は眉間をピクピクさせ、さらに顔を赤くする。その時錫が「あ」と小さく声を上げた。

「どしたのすずっち」

すると錫は瑠慰好に耳打ちする。瑠慰好はニヤリと悪い笑顔を浮かべた。

「あのさ、すずっちが空腹を紛らわすイイもの持ってんだって」

この時点で愛美はこのコンビが何か企んでいると気づいているが、当然口には出さなかった。

「はあ？ほんとかよそれ」

「ほんとほんと、貰いなよほら」

錫がくいくいと左手で手招きする。香夏はしびしび乗り出し、錫の隣に座った。

「ほんとに効果あんだろうな」

「大丈夫、きっと食欲無くなるから」

そう言って不自然に背後に回していた右手の握り拳を香夏の眼前に繰り出し、パツと開いた。

「なんだよ何もー**フギャアア**！！！！！」

次の瞬間香夏はハンマーで鼻を殴られたかと思うほどの悪臭に体を跳ね上げ叫び声を上げた。反射的に鼻を押さえのたうち回る。

イイモノとは紛れもない錫の握りっぺであった。

「うがああ！くっせえええ！！鼻があああ！！」

「あははは！す、すっごい暴れちゃってる！」

あらかじめ鼻をつまんでいた溜慰好が鼻声で大笑いする。香夏はなおも大声で悶えるが、幸いここはカラオケボックスなのでやはり問題はない。

「お、おい！危なかったろうが！先に言えって言ったろ！」  
愛美もとっさに鼻を守り笑いながらそう忠告するが、そこそこ危なかったのか割と本気の発言であった。

「お前ら後でクロス……」

「ご、ごめんごめん！でも食欲は収まったでしょ？」

「うぶ……まあ確かにそうだけどよ……ちよつとキツ過ぎないかこれ」

「そこまでとは思わなくて、ごめんね」

香夏が震えた声で心からの怒りを見せたため溜慰好は少し慌てたが、なんとか許しを得た様である。その間に愛美は部屋の扉を開けて換気を済ませた。

一方、同じく笑みを浮かべしばらく見ていた錫は、また芋を消費する作業に移っていた。

「げ、まだ食べるの？てか自分のオナラとはいえ気持ち悪くないの」

「フグは自分の毒では死なない」

「そういう話でもないだろ……」

愛美達はやや引き気味であったが、そんなことにはお構いなしの錫はあることを思い出した。

「ニオイといえば……あの人って鼻が良かったりするの？」

「あの人ってゆかりん？」

「そう」

「確かそうだよ、人より少し匂いに敏感だって昔言ってたかな。なんで分かったの」

「分かったっていうか、あの人私に近づいた時に少し顔をしかめてたからなんとなく言ってみた」

「へーそうなのか。多少風呂に入っていないだけでも気づく

くらいには良いんだな」

「そうらしいね、だから匂いフェチになったらしくて、昔  
よくい匂いの消しゴムとか持ってた見せてくれたよ。ウチ  
はどーでもよかったけどさ」

半笑いで溜慰好がそう言つと、まだ若干息を整えている香  
夏が天井を見つめながらぶっきらぼうに言葉を放つ。

「ふん、それならスズの屁でも嗅がせてやりやいいんだよ」  
「っ！」

香夏の言葉に愛美はハツとして真面目な顔になる。

「あははは、それいいかもね、凄く効きそうだねゝなんて」

「……いや、なるほど！香夏お前やっぱ流石だな！」

「は？」

「そうだよ、それなら痕跡も残らないしあいつもパニク  
る、すげーいいじゃんか！」

興奮して立ち上がる愛美を、周囲が啞然とした顔で注目し  
た。

「え？まなみっちそれって……」

「お前ら今度焼肉連れてってやるから予定空けろよな」

「は？なんだよ急に？」

「焼肉！」

「え、ちよちよ、待ってまなみっちマジ？」

各々反応を見せるが、しっかり状況を把握しているのは瑠慰好だけのようで、愛美に質問をぶつけた。

「大丈夫、金はアタシが全部出してやるよ、金だけはあるからな」

「いやいやそういう問題じゃなくて！てかウチらもやんの？」

フンと笑う愛美に未だ整理のつかない瑠慰好があたふたと問いかける。

「なんだ瑠慰好恥ずかしいのかよ」

「ま、マジなんだ……いや、そりゃやるとなったら多少はハズいっしょ、それに急な話だし……」

「なんだお前根性なしだな。あいつに一泡吹かせてやろうぜ、きつと面白いぞ！」

「うう……まー、まなみっちが本気ならウチはついてくけどさあ」

「フフ、流石瑠慰好！かわいいやつだなこの！お前らもやるよな？」

瑠慰好を抱き寄せ頭をグシグシとなでながら愛美は聞いた。

「焼肉！奢り！」

「は？おいなんだよ？何の話なんだよ！？」

錫は本筋を無視して目を輝かせ、香夏に関してはそもそも何も理解していないようである。

「よし、じゃ決まりだな」

「かなっちは無視なんだ」

「店はこっちで予約しとつから、詳しいことはラインのグループでも作って後で打ち合わせるか、じゃ、出ようぜ」

「だから待てって！おい！つかダイエット中だって言ったろお！」

騒ぐ香夏を一旦置いておき、早速スマホを取り出す愛美。しばし話した後、すぐに店を出て解散した。

こうして彼女たちの逆恨みから本格的な報復が始まったのである。

三日後。彼女たちは放課後の活動に励んでいた。先日の騒動の中心だった例の三人は嘘のように真面目に取り組みしており、違和感はあるものの友香梨も他の生徒も少し安心していった。そのため彼女達の行動も逐一監視されず、仕事が任せられるようになってきていた。

そんな折友香梨にクラスメイトの女子から声がかかる。

「愛美さん達が？」

「うん、今クラスの出し物の看板作ってもらってて女子更

衣室にいるから行ってきてくれない？」

「ええ、判った行くよ」

彼女が言うにはあの三人で作業させると連携が取れて効率よくやってくれるそうで、今は完全に彼女たちだけに任せているらしい。そんな中愛美が相談があるから友香梨を呼んでほしいと、この女子に頼んだのだ。

「あ、そうだ、終わったら帰っていいよもう遅いし」

「うん、掃除終わったら帰るわ。じゃあね友香梨」

「はいじゃあねー」

時間は遅く、もうすでに多くの者が玄関を後にしていた。今声を掛けてくれた彼女もまた帰る所であった。

「じゃあいつてくるから先終わってて、いつ終わるか分からないから待たないで帰ってね」

友香梨が自分のいたグループに戻ると、彼らの作業もこの日の分はほぼ終了していたようだったのでそう伝える。

「あーじゃあカバン持ってたらず？あたしらもう帰れるから」

「そうだね、そうする、それじゃね」

「ういーお疲れー」

「ゆっか乙ー」

友香梨はカバンを持ってその場を後にすると女子更衣室

に向かった。向かう途中友香梨は少し足取りが軽かった。あの愛美がクラスの行事に参加し、しかもこんなに遅くまで真面目に取り組んでいる。愛美の胸に感動に近いものがこみ上げ、これから愛美とももっと仲良くなれるかもしれないという期待が湧いてきていた。この間のことを謝らねばいけないと少し反省する。

そう考えている内に到着した。無機質なドアの周りに人の影はなく、どこか不安を煽る空間であった。必要ないだろうとは思ったが、生真面目にノックして扉を開ける。

「みんな遅くまでお疲れー」

「おう桜庭、わりいなわざわざ」

笑顔で入ると分かりやすい場所にいた愛美が笑顔で振り向いた。隣には溜慰好が、ロッカーには錫がもたれかかっている。

彼女たちは広めの部屋の真ん中ほどにいた。白い壁と薄いピンクの金属製ロッカーに電灯が反射するのに加え、窓から若干入る陽光が彼女たちを淡く包んでいた。

「今あなた達だけ？」

「まあな、最初からあんま他のクラスの奴らも少なかったけどさ、いたやつらも皆 “帰った” よ」

正確には帰るようにそれとなく促したのだ。波風は立てな



いように。幸い他の者たちもほぼ作業が終了していたので素直に帰ってくれた。

「そっか、看板はどんな感じ？」

「大体いいとこいったかな。もう出来るだろ」

「あんまり無理して残らないでね？ところで相談っていうのは？」

「ああ、それなんだけどさ」

愛美はスタスタと友香梨に近づき目の前で止まる。先ほどからずっと笑顔であったが、友香梨はその表情を間近にして不穏な空気を感じ取った。正確にはその鼻がだ。

愛美が近づくと、どこかで嗅いだこともあるような嫌な臭いが漂ってきた。

「んっ……！」

「あれ、どうした急に顔しかめて」

「い、いやなんでも」

「あーもしかして臭っちゃったかな、悪いな、昼飯ニンニク料理だったから」

「あ、そうなの……ご、ごめん顔に出しちゃったね」

「いやいや気にしてないよ、こっちこそ匂いフェチのお前に不快な思いをさせちゃったな」

「え、なんでそれを……」

愛美と瑠慰好がニヤニヤと浮かべた笑みに、友香梨は背筋が寒くなるのを感じた。言い知れない不安が色濃くなってくる。

「それで相談なんだけどさ、アンタにしか出来ないことなんだ」

「私だけに？」

「そ、アタシら今色々溜まっててさあ、そのはけ口が欲しいんだよねえ」

「それって……っ！」

懸念が確信に変わった時、友香梨は自分が囲まれていることに気づいた。右後ろに錫が、そして左後ろにはいつ現れたのか隠れていた香夏がいた。瑠慰好は後方の扉の前にいる。

「あとついでだから、せっかく持ってきてもらったしお小遣いもちよつともらおうかな」

愛美が友香梨のカバンに目を向ける。思いがけない収穫になったと内心舌なめずりをした。

「まなみっち入口はオッケーだよ」

瑠慰好は念のため外を確認してから鍵をかけそう伝えた、「この間の復讐ってわけ？私あなたのこと最近少し見直してたんだけどな」

苦し紛れに笑顔を見せる友香梨。内心怖さもあるようだが、

彼女は毅然と構えていた。

「へーそりやどうも、優等生さんに褒められて嬉しいよ」

「錫さんまでこんなことに加わって、信じられない……こんなことやめてよ！」

「あなたが勝手に思ってただけで、私はこういう人間だから」

信じられないといった顔をしながらも僅かな希望を錫に託すが、帰ってきたのは冷たい目線と言葉だった。

「こんなことしても何にもならない！それに私は暴力ごときで負けないから！」

ショックが続くが尚も食い下がる友香梨に、愛美はわざとらしくため息をついた。目の前で思い切りニンニク臭い息を嗅がされ友香梨は思わず顔をしかめた。

「頭いいのになんにも分かんねーんだな。少なくともアタシらには意味があんだよ。それに暴力なんて必要ねーよお前ごときに」

友香梨は何を言ってるのかは分からなかったが、最後まで説得を試みることにした。

「何をするのか知らないけどこんなことやめて、こんなの間違ってる。この間のことであなた達を傷付けたなら謝るし、それに——」

「あーもうほんとにうぜえ、もういいやろうぜ愛美！」

「「めんまなみっち、うちもそろそろキツイから早く……」

とうとう痺れを切らす香夏と何かそわそわする瑠慰好。前座を大事にするタイプの愛美だったが、仕方ないとばかりに失笑した。

「よし、じゃあやれ」

「きやつ！ちよつ、離して！！」

愛美の号令とともに後ろ二人が友香梨を押さえつける。どちらも力が強いだけいくら運動神経がよい友香梨でも抵抗が意味を成さない。そのうち手と足をロープで縛られ床に膝をつく。文化祭の準備で使うものだ。この部屋にある全てはこの時のために用意されている。

「うぐっ、く……ほどいてよ！誰か！」

「うるせーな誰も来ねーよ」

もうほとんどの生徒が帰っており、まして教室や職員室から離れたこの場所では助けがくるのは絶望的と言えた。

「あなた達「こんなことしてただで済むと思ってるの！？絶対後悔するわよ！」

「は！知らねーよそんなこと。それに後悔すんのはそっちだ。これが終わったら二度と逆らえないようにするからな」

「ふん！私はこんなことには絶対屈しないから」

「へーそう、それじゃさっそく始めても大丈夫だな？おい  
トップバッターは？錫はトリに残しておくとして……」

愛美が楽しそうに笑いながら皆に聞く。

「ま、マジでオレもやんなきゃいけないのか？」

「当たり前だろ、奢ってやったんだから」

「オレは無理矢理食わされたんだぞ！それにこんな……よ  
りによって屁って……」

香夏は既に頬が真っ赤になっている。普段ガサツな素振り  
をみせるが意外と女の子らしいところが強く出ている。

「しゃーねーなじゃあルイズは？」

「う、ウチもまだ……あ！で、でも！うぐ！いや、う、う  
んまだ……」

「なんだよお前ら、仕方ない、もう少し楽しみは取って置  
きたかったけどアタシがやるかな」

やれやれと少しだけ落胆する愛美だったが、いまから苦し  
む友香梨の顔を想像するとゾクゾクとした。悪意に満ちた笑  
顔で近寄り、状況が全く呑み込めない友香梨の心拍数を上げ  
る。体が火照り、未知の恐怖で思考がぼやける。リンチの恐  
ろしさを彼女は初めて思い知る。

愛美が目前に迫り、いよいよ手を出されると思ったその時  
だった。

「もう無理！まなみっちどいて！」

突如瑠慰好が駆けてきて愛美を押しのとけると、その場で急旋回し呆気にとられた友香梨へ臀部を向けた。そして――

**ぶばっ！ぶびいー！**

突如部屋に汚らしい音が響く。瑠慰好の尻から放たれた音はスカートをふわりと浮かせると同時に、熱い空気の塊として友香梨の顔面に勢いよく叩きつけられた。

「ふえっ！？ひゃあああ！！げほっ！こほっ！くっつさあー！！」

「ふいい……間に合ったあ……」

片や安堵の表情を、片や苦悶の表情が対照的に存在していた。

友香梨は状況が呑み込めなかったが、それよりも顔にまとわりつく悪臭に思考を奪われた。特に彼女の鋭敏な鼻はガスの刺激を余すことなく受け止める。

苦しみ暴れる友香梨の肩を錫ががちりと抑えて離さない。

「なんだよお前我慢してたのか」

「えへへ、だってやっぱ恥ずかしくてさ、でも勢いに任せれば大したことないね……ていうか」

「うわくっせえ！」

「げほ！おい！オレ達巻き込むなよ！」

「そんな無理に決まってるじゃん」

ワンテンポ遅れて臭いが愛美達にも届く。強烈な腐卵臭は本人でさえ少しきつかった。

「うええ、我ながらすごい臭いだよ。すずっち平気なの？」

「平気、自分の嗅ぎなれてるから」

錫は涙目でむせ返る友香梨のすぐ後ろで涼しい顔をしていた。

「ごほっ！これって……おならあ……！？」

ようやく状況に整理がついてきた友香梨は咳き込みながら声を出す。

「あったり前じゃん、それ以外何があるってのさ」

「お前が鼻が良いって溜慰好から聞いたからよ、くっせー屁でリンチすることにしたんだ。その方が殴るより楽しそうだし、新しいだろ？ちなみに昨日は全員焼肉食ってるからキツツイぞ？クフフ」

愛美がウキウキとした表情で状況説明をする。友香梨にとってそれはあまりにも衝撃的だった。確かに馬鹿馬鹿しいかもしれないが、さっきの溜慰好の一撃は友香梨にとってともしれば拳で殴られるよりもキツイ一発であると思えた。これからなされることを考えると、友香梨の奥歯がガチガチと鳴

った。

「どうやらかなり堪えてるらしいな、愉しみがいいが有りそうだ」

愛美は下品な笑みを浮かべる。その横で瑠慰好がまた落착かない表情をしていた。

「うう！まだまだ出そうだよ……お昼サツマイモとかも食べすぎたな。ねえもっかいウチがやってもいいでしょ？」

「ヒウツ！もう一回！？や、やめて……！」

友香梨の言葉をよそに愛美に視線を送る。紅潮した顔に汗が伝い小さく息が荒れている。恥辱とはまたべつの感情が彼女を支配しつつある証拠だった。

「なんだよ瑠慰好のってきてんじゃん」

「うん、なんかさあ、あのゆかりんがこんな表情してんの見てたら楽しくなってきたやつた」

瑠慰好がニヤリと齒を覗かせると。友香梨の表情がこわ張っているのが分かる。瑠慰好はそれが気持ちよくてたまらなかった。

「いよっしゃ！任せたぞ瑠慰好」

「えへへ！りょーかい！」

「やめて瑠慰好！こんなこと間違ってるよ！」

友香梨がプライドもそこそこに命乞いをする。恐怖と虚勢



が入り混じるその様は瑠慰好のみならずほかの全員に心地よかった。

この時点で作戦は成功したと言えた。臭い責めは友香梨に十分すぎるほどの効果がある。あとはじっくり弄ぶだけだ。

「え〜どうしよっかな〜、このために昨日頑張っただけで肉食べたし、お昼だって肉とか卵とかお芋とか色々努力したんだよ？」

「オメー焼肉は嬉しそうに食ってたじゃねえかよ」

「あはは、まなみ様には感謝してますって」

彼女たちは笑いあう。しかしその笑顔が友香梨には狂気にか見えなかった。まるで殺しを楽しむサイコパスキラーのように映る。これからいつまであの地獄が続くの考えると胃が痛んだ。

「瑠慰好……私たち幼馴染でしょ……？」

同情を誘うつもりその言葉に瑠慰好はピクリと眉をひそめた。この瞬間彼女の中で何かが吹っ切れた。

「幼馴染？まあそうだね、それを考慮したら今ので勘弁してあげてもいいかな？」

「瑠慰好……」

瑠慰好は物憂げな表情を見せる。友香梨の表情が明るくなる。やはり友情はまだあったのだと。

「うーん、やっぱりダ〜メ〜！キャハハハ！」

「えっ……」

その希望は脆くも打ち砕かれた。溜慰好は見下すように友香梨を見おろし大きく息を吸った。

「だってゆかりん最近ウチのこと完全に見下してるよね？いい子ぶってんのもぶっちゃけうざいしムカつくんだよね、人を見下しとして何が幼馴染だよ、人気者だかなんだか知らないけど偽善者がチョーシ乗ってんじゃねーよアバズレ」怒濤の勢いで毒を吐く溜慰好。今まで見せたこともないような一面に、友香梨はもとより愛美や香夏、錫ですら啞然とする。

「え、な……」

「なに？なんか言うことないの？」

「あ……！」「ごめん溜慰好！あなたのこと傷つけてたなんて知らなくて！でもそんなつもりなくて、私はーむぐう！」

必死に説得する友香梨の口を、唐突に柔らかいものが塞ぐ。嫌な臭いと温かみのあるそれは溜慰好の尻だった。

「あーもーうるさいし長いからもういいや、それにまたギヤーギヤー騒がれても耳障りだし口閉じてもらうね。すずちしっかり押さえててね」

「うん」

錫が後頭部をスカートに入れ後ろからグイッと押し付け、  
瑠恵好は鼻頭に肛門をぐりぐりと合わせる。

「ハハハ、なかなかえぐいなお前」

「あいつ本格的にいじめの才能あるな」

愛美は瑠恵好の意外な下衆さに不良の血が騒いだのか  
テンションが上がり、香夏も独特な感心の仕方をする。

友香梨は押し付けられる尻を嫌がって頭を振るが最早逃  
れることはできない。

「逃げられないってバカだなあ、それじゃ匂いフェチの幼  
馴染のために友情のプレゼントをあげるからしっかり受け  
取ってねー、んっ！」

**ぶっ！ぶびいいい！ばっすううう！**

ぐるると鳴って下ってきたガスが菊門をこじ開け豪快に  
瑠恵好の尻を震わせ、そのまま直結で友香梨の鼻に注ぎ込ま  
れる。外気に触れることなく濃厚なまま送られたそれは友香  
梨を絶叫させるに十分であった。腐卵臭に加えたい肥のよう  
な臭いは筆舌に尽くしがたい。

「んむぐうううう！……んぐ！ふむううううう！……！」

「アハハハ！すっ！い暴れてる！そんなに気に入ったのか  
な？アハハ！」

一発放つごとにビクンと痙攣し叫び声が体に伝播し、それに合わせて溜慰好も身悶えた。オナラで相手を凌辱する悦びに目覚めていた。

「ふいー、すっごい気持ちよかったあ、一先ずここまでにしとこうっと」

恍惚の表情で友香梨から離れる。その瞬間友香梨は大きくむせ返り、何度も嗚咽を繰り返した。顔は涎と涙と鼻水で洪水になっていた。

「げほっ！く、くさすぎる……うぷっ！」

「うわ見てあの顔、マジウケんだけど！えへへ、きったない顔だなあ」

「あはははマジきめえな、委員長様が情けねーじゃんかよ」

「皆もやってみなよ、思ったより楽しいよこれ」

「うーしじゃあそうすっかな、こんだけ効果あるならやりがいあるよな」

「そ、その前に窓開けねえ？においやべえよ」

辺りに広がる溜慰好の香りに鼻を摘まみながら香夏が提案する。

「はあ？窓なんか開けたら外から聞かれるかもしれないねえだろ、ちよっとくらい我慢しろよ」

「むしろ溜慰好の匂い、好き」

「やだなあ照れるよすずちい、にやははは」

「ついていけねえ……」

困惑する香夏をよそに愛美達は盛り上がる。この間は友香梨にとってインターバルとなったが、むしろいつまたあの責めを受けるのか恐怖が募り不安を増幅させ彼女の心を確実に蝕んでいく。

なんとか拘束を解こうとするもロープは固く結ばれており、ホールドも非常に力強い。おまけに溜慰好のガス責めに加え先ほどから漂うまた別の異臭——錫の体臭である——で力も入らない。そのことがますます彼女を焦らせ絶望へ導く。手足は震え冷や汗が噴出し嘔吐感が襲う。未だかつてここまで神経を削られたことはなく、段々と彼女をメンタル面で弱らせていた。

「んじゃ再開すつか。私も楽しみにしてたんだよ」

不敵な笑みでにじりよる愛美に友香梨は慄いた。逃れられないと分かっているにもかかわらず細胞に逃走用の電気信号が送られ体を揺さぶった。

「いや！こないで……や、やめて……」

「もう弱音吐いてんの？最初の威勢はどこいったんですかあ？」

クスクスと笑いながら愛美は友香梨の前髪を乱暴に握っ

て顔を上げさせた。友香梨は小さく声を上げ悔しそうに睨み据える。

「まだ元気ありそうじゃん。錫、こいつ仰向けにするぞ」  
錫はこくりと頷くと暴れる友香梨を無理矢理床に寝かせ、  
愛美がそれを押さえつけるように腹の上に体重をかけて座る。友香梨がウツと声を上げ一瞬呼吸が停止した。

「やっぱ69で顔騎が一番だよなあ」

「うわー流石まなみっちキツツイねー」

「そ、そんな……そんなのって……」

愛美達の笑顔が友香梨の顔を絶望で満たす。友香梨はもはや自分が彼女たちの玩具でしかなくなっているという現実を認識しさらに吐き気を催す。

「シックス？ガンキ？」

そんな中一人変なところでつまづいて難しい顔をしている香夏に愛美が顔を向けた。

「あー香夏、やっぱ先お前がやれよ」

「へ？は！？なんでオレが！」

突然の指名に分かりやすく取り乱す。

「だってお前今腑抜けてっから碌にできないだろ？だからさっさと済ませたいの。それとも一発も出来ないのか情けねー」

「こ、このやろお……誰が腑抜けだ！」

「んじややってくれるよな？」

「うぐっ！く……」

愛美は香夏の性格をよく知っていた。無論扱いやすいこともだ。こうなると香夏もプライドのためにやるしかない。香夏自身もこれが愛美の挑発だとは分かっていたがこうまで言われると黙っていられない。愛美の腹立たしいにやけ顔を睨みながら啖呵を切った。

「上等だよやりやいいんだろやりや！」

覚悟を決めた香夏がのしのしと歩み友香梨の頭の側に立つ。愛美はそんな姿がおかしくて仕方なかった。

「おーいいじゃんか香夏く奢ったかいあるわ」

「かなっちってやっぱかわいいよね」

「乙女」

「うるっさいよお前ら！」

他二人も一緒になって冷やかしてきたのを一喝すると、友香梨の顔を見おろす。

「じ、地獄を見せてやるから覚悟しろよな」

悪役のように恐ろし気な笑みを浮かべて演出しようとするが顔が明らかにひきつっているのと、安っぽい文句で精いっぱい脅そうとしているのを見て周りは笑いを堪えていた。

が、瑠慰好が耐え切れず「ブフツ！」と声を漏らして香夏がキツと睨みつける。その顔は真っ赤になっていた。

「か、香夏さん駄目だよ女の子がこんなこと！みつともないし恥ずかしいよ！」

「うう……」

友香梨が香夏の心の隙を突こうとして揺さぶりをかける。香夏の制止に関してはまだ希望があった。

「うわなんか言い出したよあいつ。かなっち気にしないでよ」

「わかってるよ！てかお前が言うな！」

なんだかんだと瑠慰好の言葉に後押しされ、ついに覚悟を決めた香夏は、友香梨の頭の上側に体の正面を向けヤンキー座りをしスカートを捲って鼻先に尻を突き出した。

「あ、ちょい待って」

ここまで来て愛美からの制止が入る。パンツ丸見えの状態の水を差されて香夏は苛立ち気味に振り返った。

「んだよ今度は！」

「わり、これ付けといった方がいいと思ってさ」

そう言って友香梨の口元になにかを持っていく。それは工作作業のためと偽って予め用意していたガムテープだった。

「こいつで口を塞いどきや口呼吸できねーじゃん？お前で



も確実に嗅がせられるぞ」

「余計なお世話だこんにやろー」

そうは言うが内心少し感謝していた。溜慰好のように鼻に押し当てるまでの勇氣は出せないからだ。

「むぐう！ううう！」

二重に貼られたガムテープに抵抗しようとするが、まったく剥がれる気配はなく友香梨からは無様な唸りと激しい鼻息しか聞こえてこない。

「よっしゃ任せたぞ香夏」

「なんでこんな……んっ、く……」

ぶつぶつと言いながら腹部に力を入れる。食べる量こそ少ないものの彼女もガスを溜める努力を行ってきたうえ、体勢のおかげもあってかすぐに下腹部で空気が移動する感覚が脳に伝わる。

「う、出る！」

ブボぶびいいいいぶびっ

甲高い音と濁音の混じった滑稽な響きが香夏の臀部から三回放たれた。

「んぐうー！ぐっ！んぐんっ！」

口呼吸できない状態で鼻先に放屁された友香梨は息を止めようとするも間に合わず、大気と香夏の屁の混合ガスを全

て鼻で吸入し顔を真っ赤にしてむせ返り悶える。発酵したような臭いと生臭さがむわっと鼻の中に広がり非常に気持ちが悪い。また、口が使えない分咳を出すこと自体も彼女を苦しめる。鼓膜が破裂しそうな恐怖に見舞われる。時同じくして香夏の顔も同じく赤くなっていた。

「あう……スツゲエ変な音出しちまった……」

目にうつすら涙を浮かべた彼女はよろよろと立ちあがりスカートの手でぎゅっと押さえた。

「いいねえかなっちナイスオナラ！」

「う、うるせえ」

「でも結構苦しんでるみたいじゃん、見ろよ」

愛美の言葉で友香梨に目をやる。そこにはあの常に自信に溢れていた顔の友香梨はおらず、涙目で苦渋にまみれた表情をしていた。たかが何発かのオナラでだ。脳にゾクリとわずかな電流が走り、小気味よい気分を満たされた。

「……んまあ、確かにこいつには効いてるみてーだな」

「でしょ？面白いっしょ？かなっちもまだ遊んでこーよ」

「いや別に面白かねーけど、付き合ってやるよ」

「満更でもなさそうだけどなお前も」

愛美がにやつきながら香夏の顔を見る。香夏は顔に出るタイプだということを知っているためか、すぐに気付いたよう

だ。

「はあ？別に……つかマンザラってなによ」

「あー……なんでもない、次アタシやるな」

愛美はやや呆れると、気を取り直して友香梨の方へ移動し、彼女を見おろして歯をのぞかせ小さく舌を出した。

興奮すると唇を舐める癖がある彼女の姿は、まるで獲物をどういたぶって捕食するかを吟味するハンターのように友香梨の目に映った。友香梨の全身が震えだす。

「アタシはこんなもん必要ねーから」

そう言うのと乱暴に口元のテープを剥がす。痛々しい音と共に友香梨の口が解放され、咳き込む音が鳴り渡る。彼女の呼吸器はこれ以上の異物を拒否していた。

「ブハッ！はあ、はあ……お、お願いだからもう……私が悪かったから……」

「土下座して謝ったらゆるしてやんなくもないけど」

「じゃあこの紐解いて！そしたら、ケホッ！土下座するか  
らー！」

「駄目に決まってんじゃんバカじゃね？」

「そんな、無茶苦茶よ！」

「なんか文句あんのかよ？とにかく土下座できねーんなら  
続きだな」

「あなた本当に最低よこのクソ不良！」

「おいおい優等生さんがそんな汚い言葉使っているんですかあ？ま、アタシにとっちゃ誉め言葉だけどさ、委員長様からそう言って頂けるなんてむしろ光栄か」

愛美はクスクスと勝ち誇って笑う。もちろん最初から解放する気などない。こうやって遊ぶことがたまらなく快感なのだ。友香梨が怒りと絶望から声にならない声で唸る。

「うわーまなみっち性格わるー」

「だからもてねーんだぞお前」

「余計なお世話だコラ」

さっきの仕返しとばかりに香夏が愛美を煽る。愛美は眉間をピクリとさせつつも会話を楽しんでいた。

「それじゃ、おいしょっと」

「やめ……ふむぐう！」

容赦なくそのむっちりとしたお尻を友香梨の顔の上にドンと下ろす。頭をすっぽりスカートで覆い、鼻と口を完全に塞ぐ。友香梨は何とか首を振ってみようとするが相当の体重がかかっているためそれは叶わない。顔全体に一枚の布越しに愛美の体温が伝わる。人肌の温かさなどという心地よいものには感じなかった。生暖かく湿気っていて生臭い空気が呼吸するたびに入ってくる。口はふさがれ碌に空気が入らな

いため、ほぼ全てを肛門付近の窪みから鼻で取り入れざるを得ない。気持ち悪さに視界がグラグラと揺れた。

「そんじゃ、お前が馬鹿にしてる出来損ないの怖さ教えてやるよ、んっ……!」

顔の上から小さな振動が伝わる。それは自分の方へ向かって来る。鼻の上で柔らかいものがひくひくと脈打つを感じる。愛美の体が友香梨に直接カウントを下している。

銃口を向けられた死刑囚のような感覚に陥り、友香梨の鼓動と呼吸が否応なく速まった。

**ブウウウー!ブー!**

「んぐううう!!!ん!ふむううう!」

友香梨の体が小さく跳ねる。純度が高くそして今までよりも濃く強烈なニンニク臭のする毒ガスが容赦なく吹き込まれる。鼻から通ったそのガスは口から出ようとするも通り抜けられず体内を循環する。臭い、気持ち悪い、臭い、苦しい。友香梨の思考範囲が一瞬で狭まった。

「うははは!やっべー暴れんなこいつ!ほらまだまだ出るぞ」

**ボフウー!ビィ!**

「んぶううう!むふう!」

その外見からは想像もできない汚い音を立てて放屁する

愛美。抵抗を続ける友香梨の動きが徐々に弱まっていく。周りがその様子を笑いながら見物する。まさに鬼畜の所業であった。

しばらくすると愛美が腰を上げる。むわっとした不潔な空気が一気に解放される。愛美は力なくせき込む友香梨の体を跨ぐ姿勢は変えずくりと周り、顔を見下ろし満足げにぽんぽんと尻をはたいた。

「ちっ、きったねえなケツビチヨビチヨにしゃがって」

愛美のパンツが濡れているのが友香梨の涙や涎、鼻水や汗のせいだということは友香梨の悲惨な顔ですぐに分かった。筋肉は弛緩し体液で溢れ目は虚ろになっている。

愛美は不機嫌そうに友香梨のわき腹を蹴飛ばした。

「ぐうっ！……え、お、っ！ぐふっ、けほ……くっ！」

「この程度で情けねーなおい」

呼吸がままならない中蹴られた友香梨は小さく呻くとまた吐き気と咳に襲われる。顔には愛美の凶悪な臭いがこびりつき、体液にオナラが溶けて残留しているような感覚に捕られる。顔面騎乗から解放されても、彼女の顔に愛美は居座り続けた。地獄から解放されることはない。

「ケホ！いやひょうがらいよまなみっていのおならめひゃくららもん」

「どうなってんだよおまえの腹はあ！ヴェッ！」

瑠慰好と香夏が鼻を摘みながら言う。瑠慰好はまだ笑う余裕があるようだが香夏に至っては顔が青くなっていた。

「なんだよお前らまで、錫見習えよ」

二人が錫を見ると彼女はいつものすまし顔でピースし余裕をアピールする。

「むしろニンニクの良い匂い」

「ほらこう言ってるぞ」

「そのカメモシ女とオレら一緒にすんな！」

「ぐふっ、カ、カメモシ女って！アハハハ！」

香夏が全力で突っ込み、それが瑠慰好のツボに入ったようだ。だがこのやりとりは友香梨にとって笑えるものではなかった。混濁しつつある意識の中でもそれが錫からも臭い責めを、それともすれば今より強烈なことをされる可能性を示唆しているのだから。

「さて、匂いフェチの友香梨さんも分かってくれたよな？

アタシのオナラの良さ」

「ふえ！？な、ええ！？」

突然筋の通らないことを言われて動揺する友香梨。そんな彼女に愛美はグイッと顔を寄せ威圧する。

「だからあ、良い匂いだろっていつてんの。せっかくアタ

シが匂いフェチのお前のために昨日ニンニクたっぷりで焼肉食ったり、昼飯もニンニクに加えて卵とか食って努力したんだからさ、感想言っしてほしいんだけど」

「そ、そんなもの臭いに決まってるでしょ！」

「ふーんそんなこと言うんだ。シヨックだなー、アタシだって一応女なのになさ？」

心にもないことを言っているのは明白であったが、これが何を意図しているのか友香梨には分からなかった。

「しょうがないなあ、それじゃ友香梨さんにちゃんと良さを分かってもらうまでサービスで嗅がせてあげましょー」

「んな！そんな！」

「いや遠慮すんなよ真心込めた屁を届けてやるからよ。こっちはいい香りで友香梨さんに喜んでもらいたいだけだから」

「う、嬉しいよ！愛美さんの気持ちは十分伝わったよ！もういいから！」

「さつきと言ってることちげーじゃんか、なんか信用ねーよな。やっぱもっかい嗅いでもらった方がいいな」

「ヒッ！たすけ……むきゅっ！」

逃れる術などなかった。彼女はもはやただ遊ばれるしかないのだ。友香梨の顔にまた臭くて重くて不快なもののがのしか



かる。それとほぼ同時に激しい微振動と共に愛美の腸内の空気が押し込まれた。

**ぼぶーぶすうー！プシュウウ！**

「んぐうー！」

また激しいニンニク臭が鼻腔に充満する。べとりとした気体が空気の通り道を埋め尽くしていく。自分自身が “悪臭” そのものになっていくような気分陥っていく。

「どうだった私の香りは？最高っしょ？感想欲しいんだけど。褒めてくれたら私も満足だから止めてやるんだけどな」  
愛美は一度尻を顔から上げ友香梨の方を見て悪魔のような笑みで訊ねた。

「げほっ！おええ……い、良い匂い……十分良い匂いだからもう……」

**ぶずううー！**

「はううー！ごほーえほー！」

愛美は急に放屁した。呼吸を整えていた最中に不意打ちを食らい友香梨は大きくむせる。

「おいなんでタメ口なんだよてめー、嗅がせてもらってる立場だろうが」

信じがたい言葉が耳に入る。この人物にそこまでしなくてはならない、それは友香梨のプライドが激しく拒否感を示し

た。が、銃口を突き付けられ、抵抗する力もないこの状況では屈する他なかった。

「う……良い匂い、でした……」

**ブッー！** 嬉しい！

「うがぁ！うっぐう！」

「聞こえねー、誰様の何がどんな風に何だって？」

「ふひゅう……ふぐ！う……ま、愛美様の、オナラは、ハア、ニンニクの香ばしい香りがして、とても良い匂いです！」

「クフフフ、いやそんな褒められると照れるなあ、アタシら不良はあんたみたいな優等生と違ってめったに褒められねーからよ、ありがとな」

ニコニコしながら愛美が言う。とてつもない屈辱であったが、背に腹は代えられない。友香梨は唇をグッと噛んだ。

「そんな気に入ってくれたならまだやってやるよ」

「え！ちよつと話がちが……！」

「フフ、いいから遠慮すんなって」

彼女が約束など守らないと分かっていた、だが悔しかった。褒めたら終わると少しでも思った自分が馬鹿だった。友香梨は目の前に再び迫るに絶望し、堅く目を閉じた。

だが、顔にそれが当たる感覚がやってこない。友香梨は一度目を開けた。見ると愛美は腰を浮かしていた。その前方に

はそれまで自分の体を抑えたりしていた錫が、愛美の袖を引っ張っているのが見えた。

「え、あ、錫？」

錫は上目で口を尖らせて愛美を睨んでいた。珍しく不機嫌そうに見える。

「愛美ばかりずるい。そろそろ交代」

「あ、わりいつい調子乗ってたわ、バトンタッチだな錫」  
極まりが悪そうに頬をかくと、愛美はすぐにその場をそそくさとどいた。そして錫が友香梨の腹の上に目が合う向きで乗る。愛美と違って乱暴な降り方ではなかった。

「それじゃあ、私の番」

錫は待つてましたとばかりに鼻息を鳴らすと、なにやらごそごそと後ろに、ではなく右足に手を伸ばした。そう思うと靴を脱ぎ、スルスルと靴下も脱ぎ始める。その瞬間靴からも素足からも湯気が立ち上り、近くにいた愛美が焦ったように距離を取っていた。

「この靴下、授業の時も部活の時も履き続けて5日間変えてない、お風呂にも5日間入ってない」

そう言って見せてきた靴下。おそらく元は白かったのだろうが、足首までにかけてどす黒く変色しているのが見て取れた。驚くことにこの時間までに余程汗もかいたのか、湿気っ

ていることも明らかだった。

「ま、まさか錫さんそれ……」

「これ、嗅いで」

錫はクスリと笑うと、友香梨が止める間もなく彼女の口と鼻を塞ぐようにそれを顔に押し付けた。

「んぐう！！ふぶうう！」

友香梨が悶絶する。それは先ほどまでのオナラ責めと同等の衝撃ともいえた。

その不潔な布が顔に着いた瞬間、刺すような激臭が友香梨の脳を揺さぶる。ただ単に饅えた臭いや納豆臭、銀杏臭では片付けられないような凝縮された悪臭。湿気っているためか激臭の液体に溺れているような錯覚を覚える。錫の足の臭いと表現すべきその臭いは凶悪であった。今までとはまた違ったテイストの臭いということもあり、友香梨を軽くパニックに陥れた。

「うわ、お前そんなもん用意してたのかよ」

「なんか最近体臭キツイと思ったらあの日からずっと入ってなかったんだ」

いつも一緒にいる二人もこれには驚いたが、ここまで来てそれが特別異常な行動だと思う者はいなかった。

「で、それで終わりじゃないだろ？」

愛美が次のアクションを期待の眼差しで催促する。

「まだ下味段階、これで完成」

錫がそれに応えて、どこか誇らしくも見える無表情で親指を立てると、先ほどまでのように顔面騎乗に移行する。愛美との相違点は鼻とパンツの間に靴下が挟まれているということだった。

「ちなみにパンツも換えてない」

またも自慢げに言いつつ汚れたパンツを汚れた靴下の上でぐりぐりと擦り付け位置を調整する。その間も友香梨の呻きが消えることは無い。

「うわあ。パンツと靴下で最悪の MILF ユだねこれ、いやハンバーガーかな？」

「溜慰好やめろやどっちも食えなくなるだろが」

「かなっちのダイエットには丁度いいかもね」

「いやそんなダイエット嫌だわ！これで食べられなくなったら責任取れよスズ！」

三人がそんな気の抜けたやりとりをする内に、錫は大砲の据え付けを完了していた。

「覚悟して桜庭さん、んっ！」

フスッ！ぷすうううう

開かれた菊門から控え目な音と共にガスが放出される。錫

は肛門が熱くなるのを感じた。狙った通りのスカシに満足する。その熱風は臭いが濃くこびり付いた薄い生地を抜け、さらに下層の汚れた布にドロリと浸透する。錫の臭いの全てを包含したそれは抽出されたコーヒーのように友香梨の鼻に放出される。ここまでがほんの僅かな間の事象であった。

「ふむ！？ん ん ん ！！！！んぎいい！んぶううううう！！！！！！」

それはまるで拷問を受けた人間のようなだった。断末魔の叫びのごとき絶叫が空気を震わせ、体は錫を乗せているにも関わらず反り返り、ビタンビタンと手足が大きく脈打つ。

錫の屁は他のの誰よりも臭いことは間違いなかった。敢えて例えるのなら、強く香る腐った牛乳のような臭いと腐卵臭をメインに、便臭やニンニク臭玉ねぎ臭等々様々な臭いが濃縮され熱されたようなガスだった。

だがこれがガスそのものの臭いとは断定できない。なぜならその毒ガスは最低なまでに汚れたパンツと最悪なまでに不潔な靴下で汚染されているのだから。

錫に言わせれば、これは臭く汚れたもので本来屁に含まれる“不純物”である空気などを“濾過”しているのだ。彼女自身が単体で猛毒ガス生成キットとなっているのだ。そんなものをまともに吸わされた者が平気であるはずがなかった。

友香梨の疲弊しているはずの身体は本能からか激しく暴れ、様々な液体が噴き出し、誰に届くでもない叫びを発し続ける。彼女の思考回路はただただ「臭い」「苦しい」「助けて」だけが循環していた。

**ブブブスー！ばすう！フシユウウウ！**

スカシに交じって濁音や破裂音が入り、そのバックには友香梨の叫びが流れ続ける。錫はそれを気持ちよさそうに聞いていた。とても充実した表情でだ。だが苦しんでいたのは友香梨だけではない。次第に漏れ始めた臭いが愛美達をも無差別に襲い始めていた。

「ぐっへえ！くつつさあー！！」

「は、はながまがるう！」

「お、オレもうマジで無理！窓開けるからな！」

「ああ頼む香夏！早く！」

周囲も手や制服をバタバタさせて阿鼻叫喚、否応なしに窓を開け換気する。錫はそれをキョトンとして見ていた。

「みんなおおげさ」

「いやいやいやマジでヤバイってスズさんよお」

「オナラのオリンピックあったら表彰台レベルだねこれ」

「友香梨死んでないよな？」

さすがの愛美も不安になってくる。流石にそれはないと、

錫が腰を上げ靴下を取った。

「えほっ……ハヒュー……ゲッツ！ガフツ！もうやめてえ……くさいよお、もうやだよお」

そこには虚ろな目に涙を溜め、だらしなく口を開ける友香梨の顔があった。口からは涎が滝を作り、うわごとの様に弱音を吐き、散々暴れたせいか髪が乱れている。今にも失神しそうな彼女を見て愛美達は息を呑んだ。

その時全員が抱いた感情。そこに同情、憐憫、罪悪感、などといったものは一切なかった。存在するのは興奮と快感、優越感、劣情。ひたすらに下卑たものであった。彼女達にとって友香梨のその姿は煽情的に映っていたのだ。

最早彼女らの思考は既に自らのガスに侵されていたのかもしれない。

「さ、流石錫だな……いい顔させんじゃん」

「まだやりたいことあるんだけど、いい？」

「ん、まあいいけど弱ってるみたいだから一回休ませた方がいいんじゃないか」

「確かに。そうする」

そういつて錫は友香梨を立たせ、自由の利かない彼女を補助しつつ窓際まで連れていく。友香梨は久々の正常な空気を、オアシスを見つけた砂漠遭難者の様に必死に取り込んでい



た。

その様子を見ていた愛美の元に、どこか様子のおかしい瑠慰好がそくさと近寄り小声で話しかけた。顔が妙に赤みがかかり内股でもぞもぞしている。

「あ、あのさまなみっちちよっという……」

「ん？どした、トイレか？」

「いや、ちがくて……いやちがくもないかな？えへへ、その……なんていうか新しい扉開いちゃったっていうか……したくなっちゃったんだよね、その、オナニーってやつ……私変かな？」

見ると瑠慰好は秘所のあたりに手をやっている。

「ごめんやっぱキモイよねウチ」

瑠慰好は言った後目を伏せて申し訳なさそうな顔になる。

「いや全然、興奮する気持ちはアタシも分かるからな」

「ほ、ほんと！それマジなの！？」

「マジもマジだよ。友香梨のあの顔見てっとなんかゾクゾクすんだよな」

「そう！ウチもおんなじ！よかったあなんか安心した」

瑠慰好は胸を撫でおろした。正直引かれるのを覚悟していたからだ。

「つーかなんでわざわざ言いに来たんだよ。トイレでも行

くつつつて黙ってやってこればいいじゃん」

「いやーなんていうかさあ、まなみっちに隠し事したくない……ってのは建前で、ほんとにはさ、あいつに浴びせながらやりたいんだよねえ」

「ほおーなるほどな、いいねそれ」

愛美は目を細めて笑った。そこには蔑みや嘲りなどの嫌味は感じられなかった。

「あ、あのよお」

「うおっ！ビクったあ！」

いきなり二人の背後から香夏がぬらりと現れる。どうやら今までの会話を聞いていたらしかった。

「オレも実はさ、最初は意味分かんなかったけど、これ悪くねえなって……」

「なんだお前もか」

「オレはオナニーはしねえけど、ただもうちょっとオレもやりてえなって……」

耳まで顔を赤くし伏し目でそういう彼女にも愛美は微笑んだ。

「分かった。そういうことなら……錫！」

「ん」

「お前が終わったらアタシらもまたやるからさ、ほどほど

にしてくれよな、時間もそろそろあれだし」

「了解」

錫は後ろを見やると、友香梨を窓際から離す。少し体力の回復したようだった友香梨はそれを拒もうと暴れたり声を出したが、錫の力には敵うことはできず、また誰にもその声は届くことは無かった。

「お願い、もうやめて……グス、許してよお、ヒック、お母さん……」

再び冷たい床に寝かされた友香梨はとうとう泣き出してしまった。それがますます彼女たちの嗜虐心を揺さぶることになるとは知らずに。

「うわーこれは引くわー、どうよ香夏」

「マジで無様だなあ、ママのおっぱいはお預けだよゆかりちゃん」

「すーいゆかりんの泣いてるとこ初めて見たー！泣いても可愛いつてなんかムカつくなーアハハ」

「んじゃ錫頼んだ」

「ん、分かった」

周りが友香梨を嘲笑する中、錫は今度は靴下を脱ぐことはしなかった。その代わりスカート越しにパンツを下ろしたのである。褐色の張りのある肌が露わになる。

「ちょ、なにしてんのすずっち!？」

急なことに動揺したのは溜慰好だけではなく、他二人も一様に目を丸くした。彼女はそれにいつも通りのおすまし顔で答えた。

「桜庭さんは匂いフェチなんだよね？実際今日もいい香水付けてたみたいだし、いいシャンプーも使ってたみたい」

錫は友香梨をよく観察していた。確かに彼女は良い香りの物にこだわっている。錫はそこに目を付けて彼女なりのいじめを考えたのだ。

「だから私をもっと素敵なプレゼントをしてあげる」

「プレゼント……?」

こくりと頷くと丸出しの肛門を友香梨の顔の真上へと下ろす。友香梨は小さな悲鳴を上げ目を閉じる。だが、そこからガスが顔に当たることはなかった。代わりに髪の毛を持ち上げられるのを感じて目を開けてみる。みると錫が屈んだまま自分の髪を握ってその尻に近づけ、肛門へびたりとくっつけた。髪がじよりじよりと音を立てて擦り付けられている。それだけでも不快極まりなかったが、この後されることに一つの予想が立つと、友香梨は嫌悪感と不安でいっぱいになり歯がガチガチと音を立てた。

「す、錫さん何を……」

錫はここにきてニヤリと口角を小さく上げる。

「今からあなたに、私特製のシャンプーをしてあげる」

「そ、それだけはやめ——」

**ぶびゅうううう！**

顔を蒼白させた友香梨が言い切る前だった。肛門を直に圧迫する髪の毛と指のためか、耳を疑うほどの汚い音が鳴り響く。まるで友香梨の命乞いの叫びを遮るように。侮辱するように。冒瀆するように。

「いやああ！げほっ！がはっ！」

自身の自慢の髪の毛がまさに目の前で汚染される。絶望を視覚で味わうとともに、次はそれが嗅覚に襲いかかる。握られていない髪の毛をまき散らしつつ、風がぶわっと顔にかかる。無防備だった口と鼻に思い切り流入したそれは先ほどまでとは言わずともやはり凶悪な悪臭で呼吸を阻害する。

**プビィ　ぶびゅう　ぶすううう**

「全体にまんべんなくやってあげる」

錫は次々と放屁を浴びせる場所を変える。余白を塗りつぶすように隅々まで自分の臭いを刷り込んでいく。友香梨は淡々と錫の肛門に埋め込まれ穢されて帰ってくる自分の一部を苦しみながら見ているしかなかった。

「うわあ最悪な髪染めだね」

「あいつにはお似合いの香りなんじゃね？痒いところがねーか聞いてやれよ錫、ヒヤハハ」

「っーかスズのやろうもサドっ気すげーな」

悪魔のような微笑みを浮かべながら周囲は高みの見物を決め込んでいた。そうこうする内に錫が髪全体に屁を塗り終わる。最後に髪の毛でトイレットペーパーのようにアナルをわしわしと拭き乱暴に手放す。屈辱極まりない行為である。

彼女はそのまま尻を顔の真上へとシフトした。

「はい、仕上げ」

ブッバァ！

「あううー！ぶはっおえっ」

トドメに顔面に強烈な一発をお見舞いした錫は、満足そうに鼻を鳴らして立ち上がった。

「いいよ愛美、満足」

「オツケ、つかパンツ履けや」

「めんどくさい」

錫は無造作にパンツをポケットに突っ込んだ。愛美は呆れ気味に笑った。

「まいいや、そんじゃアタシらも二回戦……」

「あのさ、ちよつといい？」

「今度はなんだよ溜慰好」

引き止められ振り返った愛美の目に、眼を爛々と輝かせる瑠慰好が映った。興奮しているようだ。

「あのさ、今のすずっち見てて思ったんだけど、こうなったら皆で全身臭くしてあげない？」

「なるほど、それも面白そうだな」

「でもオレそこまで出るかわかんねーぞ」

香夏がお腹をさする。確かに全身くまなくとなるとそれだけの量が必要になるわけだ。

「それなんだけど良いこと思いついちゃったんだよね」

「いいこと？」

「うん！ヒントはあなたの目の前にあります！」

瑠慰好は得意げな顔で右手を上げ指を立てた。

「そーいうのいいから早く言え」

「もーかなっちノリ悪いなあ、どうせ分かんないだけっしょ」

「あ？ち、ちげーよバカ！」

「悪いがアタシは分かった」

「私も」

「え？嘘！？」

露骨に焦るか香夏を見て瑠慰好はクスクスと笑う。

「えーそれじゃあヴァ力かなつちのために答え発表でーす」

「てめえこのやろう……」

「はい、答えはこれ」

ワナワナと震える香夏を一瞥して瑠慰好が人差し指で答えを示した。

「……は？何もねえじゃん」

「あるじゃん、ロッカーが」

瑠慰好が指す方向には先ほどから当たり前のように存在していた。ピンク色の上下二段に分かれた更衣用ロッカーがずらりと並んでいる。

「は？そりや更衣室なんだからロッカーくらい……あー！」

「気づいた？」

「え？えつと、この中に閉じ込めるってことだよ……な？」

「そ、大正解！」

瑠慰好は小さく手を叩いた。

「このロッカーに入れて中に屁を入れれば体丸ごと屁臭くできるってことか」

「それに臭いが籠るとそれだけ苦しい」

「まなみっちとすずっちさすがだね」

皆が瑠慰好の意見に感心し、この時点で友香梨の運命は決



定づけられた。もちろん彼女にも話は聞こえている。顔が青く呼吸が浅く速いのはそのためだろう。

「さっそく始めるか」

「もうやめて……近寄るな！離せ！」

「おい暴れんなよ！香夏手伝ってくれ」

「きゃははは！ゆかりん完全にキャラ変わっててウケるんだけど」

友香梨が最後の抵抗を見せる。いかに必死かが言葉遣いから伝わってくる。だがそれは数秒の時を稼ぐにしか至らなかった。二人に運ばれて、すぐ近くのロッカーの前に到着する。友香梨にはそれが棺桶にしか見えなかった。

「お、お願いですやめてください……もう許してください！二度と生意気なこと言いませんから！」

友香梨は震えた声で懇願した。プライドも体裁もかなぐり捨てて。

「へー、ついに下手に出ること覚えたんだ。アタシたちみたいな碌でもないヤンキーだぞ？」

「そんなとんでもない！碌でもないのは私のほうですかー！」

愛美はあの友香梨が自分にこんな風に接していることが愉快で仕方なかった。思わず笑いがこみ上げる。

「クックク、そこまで言うなら考えてやってもいいかなあ」

「ほ、ほんとですか！」

「うん、えーと……はい考えた。やっぱやるわ」

「そんな！そんなあ！」

無慈悲な笑顔を友香梨に向ける。泣きそうになる彼女を見て心底愉快でたまらなかった。

「よし、入れろ」

友香梨が下段のロッカーに押し込められる。激しい抵抗のために体がそこかしこにぶつかりグワングワンと薄い金属の音が激しく木霊し、彼女の叫びと合わさり耳障りな和音となる。

一人分のロッカーの大きさはおよそで幅が90cm、奥行きは50cm、高さ90cm程で、あまり大きくはない。だが、中の上下を区切る柵を取り外し、体育座りのように足を折り曲げれば入れることができた。女子の細く小柄な体躯だからできたのかもしれない。

「やめて！お願い！わたしなんでもするから！」

「それじゃ、さいならー」

「いや！閉めないで！たすけ——」

彼女の訴えは冷たい板に遮られた。愛美は扉をしめつつ、涙が伝う絶望に満ちた彼女の顔から光の筋が無くなってい

くのを腐った笑顔で見届けた。

部屋には鈍い金属音と金切声が空しく響き、しばらくすると大人しくなった。それが疲労からなのか諦観からなのか、またはそのどちらもなのかもしれない。

「さーてと、それでこの上の換気孔にぶっぱなせばいいわけだな」

「ちよつと工夫が必要そうだね……」

換気孔は各扉の向かって右上、尻を当てるにはやや高い位置にあった。そこで彼女たちは、看板やその他の装飾品作りに置いてあった資材を活用することにした。この文化祭期間ほどのクラスにもそういった資材を作業場に、つまりはこの更衣室に置いておくことが許されていたために、他のクラスのものも拝借すれば材料に困ることは無かった。愛美達は木材などを並べて簡易的な台を作り、その上に乗ることにしたのである。

「これでうまいこと行きそうだね！」

瑠慰好が満足げに口の端を上げる。処刑装置の完成だった。

「なんかあれだな、こうやると屁で漬け物作る気分だわ」

「ハハ、何だよそれ」

愛美の例えに香夏が笑うが、言いえて妙だとも感じていた。

「それだとウチのイメージ的にはあれだな、なんだっけ、

世界一臭い缶詰の……」

「シュールストレミング」

「そうそれ！流石すずち！さすすず！」

「あー確かに。金属に囲われててくっさい臭いで漬けるからそういう感じかもな。人間シユールストレミング作りだな」

「いいねそれ、そういう設定で行こう！」

そんな設定にはなんの意味もないが、彼女たちの楽しみ方の一つである。友香梨を苦しめるのもおふざけの一つなのだ。

「んじゃ、アタシから行かせてもらおうよ」

愛美がピトリとロッカーにお尻を着ける。ヒヤツとした感覚だけでなく、友香梨の息遣いが極僅かな振動として薄い金屬の扉越しに伝わってくる。今からこの小さな世界を地獄に変える。そう思うとゾクゾクしてくる。換気孔に肛門を重ね合わせる。下腹部に力を入れるとゴロゴロと空氣の球が下るのを感じた。

「新鮮なアタシらの特濃ガスで身体の芯までじっくり味付けしてやるよ、んっ！」

ぶ  
び  
い  
い  
い  
！  
ぶ  
お  
お  
お  
お  
お  
！

菊門が蠢き、怒濤の勢いでガスが噴射される。放屁の勢いでビーンという音がロッカーから発せられ、また放屁音が

反響することにより、実際よりも多くの放屁音が鳴っているような錯覚に陥る。ガスの全てが換気孔の狭い入口を通り、ところてんよろしく内部へ激しく流し込まれる。

「……」

「ん？息止めてんのか？いつまで持つか？んん！」

ぶつぶぶううう

呼吸を止め抵抗を試みる友香梨に対しさらにオナラを流し込む愛美。友香梨はまだ耐えられるつもりでいた。だが狭い箱の中はすぐにガスでいっぱいになり、行き場を無くしたそれは余剰領域を求め既にぼろぼろの友香梨の鼻腔へ侵入したのである。

「……！ゲッホ！ああう！くっさああ……！」

バァン！ガァン！というやかましい音に喚き声が重なる。まるでニンニクが腐ったような臭いが、今度は顔だけでなく全身を包み毒してゆく。想像以上の衝撃に手足が暴れ身体のあちこちを壁にぶつける。扉に友香梨の身体がぶつかる度に密着した愛美の臀部がジャンプした。

「よっしもう一発！ふんっ！ヒヤハハ！スゲー苦しそうだな」

ぶばっ！ともう一度大きな一発をかまし、愛美はけけらけらと笑った。

ロッカーの中は瞬時にほぼ全ての空気がおならガスに置き換わり、じんわりと温度が上がリ気持ちが悪い。更に当初は口呼吸でなんとかするとも考えていた友香梨だが、実際に吸ってみるとあまりの気持ち悪さに吐き気が襲い、まともに息もできずにむせ返ってしまう。その時には鼻から盛大に吸うはめになる。たとえ口から吸えたとしてもあまりの濃度に臭いは鼻まで達してしまう。舌を通過する時には味がしたような気もする、とびきり最悪な味だ。鼻でも口でも呼吸できない、止めることも出来ない。まさに八方塞がりであった。友香梨はオナラの臭いのする温水プールに沈められた様な気分になる。そしてどこか冷静に、悪夢とはまさにこういうものなのだろうなどと考えていた。

「ふう、すっきりした」

「えっは！がは！おえ！」

「フームこれはまずニンニクで香りづけしたってここですね愛美先生」

「ええその通りでしてよ溜慰好さん、がつつり下味をつけるのがポイントです」

愛美と溜慰好がふざけあってケラケラと笑った。

「よし次の奴いいぞ、でもアタシがケツ離したらすぐ付けろよ、中身漏らしたくねえし」

「そうそう、製造行程に穴が開いちや不味いからね、スムーズに頼むよお！」

「つーか漏れたらオレたちもやばいからな……」

「んじゃ次はかなっち」

「お、オレか、よしやってやるよ」

先ほどまでとは違い、今度は香夏表情に多少の余裕があるようだった。この状況を楽しめているようだった。

「いくぞ、せーの」

愛美の掛け声と共に香夏とくつつけた尻をスライドさせる。銃弾の排莢・装填のごとく間髪入れずに入れ替わる様子は流石のコンビ技と言えた。

「オレの怖さを体で覚えさせてやる、んっく……！」

プアー！びいびい！ピスッ！

甲高い音が破裂するように鳴る。音は可愛らしいが恐ろしい臭いを放っている。そしてここからこの密室責めの真価が発揮されることとなる。

「んぐうううー！」

「やっぱリオナラの臭いが混ざるから一人ずつ嗅がせるより臭いのかな？」

「そうなんじゃね？尻をブレンドしてるわけだからな」

「じゃあ、今の状態は、まなかなブレンド、」

「アハハハなにそれすずち！おもしろいよそれ！」

「でもそれだとコーヒーっばいし最初の設定と変わってこねえ？」

「かなつち！細かいこと気にしない！」

「んむう、まいいか」

「お客様あ？当店自慢のまなかなブレンドはいかがですかあ？つと！」

愛美がガン！と扉を蹴った。中では相変わらず悶えているためそれに反応する余裕はなさそうだった。

そう、この責めの特徴は臭いが加算されていくことになる。これにより全員の臭いの特徴などが一つの臭いとして統合され、新たな臭いとなり被害者に“慣れ”を与えさせない。常に新たな悪臭を生み出す非常に凶悪なものなのだ。

現に今友香梨は未体験の悪臭に脳の処理が追いついていなかった。ニンニク臭さメインのガスと発酵臭が強いガスがどろどろと混ざり合い最悪の化学反応を起こしている。

友香梨はあまりの臭いに嘔吐感を抑えきらず何度も嗚咽し、それが却って空気を強制的に吸わざるを得ない状況を作り悪循環を迎えていた。ただでさえ密室の臭い責めは大きな苦痛を与えるものだが、この効果は複数人で行う場合の責める側の利点である。彼女たちは集団であることを存分に活か



していた。

「それじゃあ次ウチね！はやくはやくう！」

「あ？もうかよ！」

「だってウチ一番最初だったしい、結構時間たってるしい、もう二つの意味で溜まって我慢できないんだもん」

溜慰好は腹部より下をさすっている。呼吸も荒いようだ。

「しゃーねーな」

「えへへ、かなっちサンキュ！」

抑えられないのは逸る気持ちか腸内ガスか。香夏がしぶしぶ退くとすぐさま臀部を張り付け楽しそうにフリフリと腰を振って擦り付けた。

「いくよゆかりん！覚悟！」

びいびい！

「ふむう！んぐっふ！ふぐう！！」

「どーだゆかりん臭いだろ！ハア……普段偉そうにしてる罰だからね！んく……っはあ！」

放屁に苦しむ友香梨の息遣いを感じて溜慰好の手はパンツの中にまで入っていた。秘所を悶える友香梨からくる振動に合わせてまさぐる。放屁する解放感と嗜虐心を満たす友香梨の喘ぎにより、今までにないほどの快感を覚えていた。次第に放屁と自慰のエネルギー消費からじわりと服の中が汗

ばんでくる。

「どれだけ頭良くて威張っててもなー！オナラの臭さなら私の足元にも及ばないんだからなー！」

「いや全然自慢できねーからなそれ。っーかこいつの屁嗅いだことあんのか？」

「もーまなみっちうるさいよー！まあ確かに嗅いだことは無いけどね、エヘヘ」

行為中に茶々を入れられ少々むくれるが、彼女はとても楽しんでた。会話中であれ**プスプス**と小さく流し込む溜慰好。決して猶予は与えなかった。だが急に悩んだような顔つきになり、せわしなかった手を止めパンツから抜く。ぬらりと指先が光っている。

「んーなんかこう、これだけじゃつままないなあ」

「は？」

愛美が訳が分からないといった顔をした。

「なんかもっと工夫してイジメたくてさあ……そうだ！」

何をするかと思えば、愛美の方を見て手招きする。近くにくると耳打ちするよう合図した。もちろん耳に添える手は

“使ってない”方だ。愛美は指示を聞くとにんまりと笑い頷いた。

「ゆかりん聞こえるー？いますごく苦しいでしょ？助かる

チャンスあげよっか？」

「ちゃ、チャン……ス……？」

急に話しかける瑠慰好。中から嗚咽と咳に混じりリアクションが聞こえた。どうやら食いついたようだ。

だが友香梨もちろん助かりたい、解放されたいが、愛美に騙されたばかりでそんな甘言をあっさりと信じはしなかった。

「う、うそだ！どうせウソだ！」

「んー疑う気持ちはわかるよ？でもウチはまなみっちほど卑怯じゃないよ」

「んだとコラ」

「信じてよゆかりん、信じてくれたらまた仲のいい幼馴染に戻れると思うんだ、ね？」

友香梨を揺さぶる言葉が出た。そのワードに彼女は押し黙ってしまう。

「それはオツケーってことかな？オツケーてことにしちゃお」

瑠慰好は一度息を大きく吸った。

「さあそれでは今からクイズを始めます！今からまなみっちにも協力してもらってその中にオナラを注入しちゃいます、それが誰のモノなのか当てられたらここで今日のイジ

メは終わりにしてあげるよ」

これは大きなチャンスであった。友香梨は希望を胸に抱く。彼女たちの臭いはもう何度も嗅がされているため容易に判別はつくのだ。ただし問題はある。今自分がいる空間がその彼女たちの臭いの寄せ集めであるため、新たなガスが送り込まれても臭いが混ざって判別できないかもしれない。

だが感覚を集中して絶対に嗅ぎたくないガスを一度だけ踏ん張って嗅げば、匂いに敏感な自分ならある程度嗅ぎ分けられる自信があった。特に愛美の臭いはニンク臭が強くわかりやすい。それが最大のヒントとなる。勝算はある、そう確信した。

「いい、ゆかりん制限時間は十秒だからね、それを越えたら強制失格になるから」

「お、おいほんとに正解したら逃がすのかよ」  
香夏が不満そうに聞いた。

「うん、そのつもり」

「マジかよ、愛美もスズもそれでいいのか？」

「アタシはそれを承知して協力してるからな、別にいいぞ」  
「私も、溜慰好がそうしたいならそれで」

「けっ、分かったよ好きにしろ。んだよつまんねー」

香夏は盛り上がってきたところで水を差されてブツブツ

言って口を尖らせる。そんな彼女を見て溜慰好はウィンクした。

「ダイジョブだよかなっち、正解できなきやまだ続くんだから」

「それって……？んまあ、じゃあさっさと始めろよな」  
ウィンクに気づいた香夏は何かあるのだと察した。それがなにかは分からないが。

「じゃ行くよゆかりん！発射3秒前！3・2・1……」

**ぶすっ！ぶううう！**

「うぐっ！！はうう！！」

秒読み後に流し込まれる“新鮮な”空気。想定していたよりもずっと強烈な香りに思わず息が詰まる。だがこの最低な臭いがこれ以上ないヒントであり、最高の希望である。

友香梨は自らその毒ガスを吸い込むことを決意した。

「スウ……んく！えほっ！ぐええ……くさ……はあ、スウ  
ー……」

嗅ぐたびに胃がひっくり返りそうな程の嗔咽感が襲うと同時にむせ返る。それでも気合で鼻を働かせる。胸が焼け涙が頬を伝う。今にも目が回りそうだった。

「おー！ちゃんと吸ってるねえ、どう臭い？ってそりや臭いか、アハハ」

溜慰好が茶化してくる。実際には口だけではなくこの状況に興奮しているのか手も動いているのだが。友香梨はそんな溜慰好に構わず分析を始める。が、やはり今までの臭いが邪魔をしてなかなか答えを見つけれない。

「ほらほら急いで、カウント開始だよ？じゅー、きゅー、はち……」

彼女はとても楽しそうに、そして露骨に焦らせるようにカウントダウンを始めた。友香梨は出来るだけ気にしないようにしたがそれは難しかった。これまでで消耗していることに加え今まで以上に急激にオナラガスを吸っているのだ。心理的には十分追い詰められていたのだ。当然カウントにも焦りを感じた。それでも必死に考える。今放たれた臭いはオナラの硫黄臭はもちろんあったのだが、ニンニク臭もしっかりと感じ取れた。だがそれが今までの放屁責めでロッカー内に残留していたものなのかそれとも新たなものなのか。他の臭い情報も混乱を招く。

「さーん、にー……」

確信は持てない。だがもう時間がない。自分の嗅覚を信じるしかなかった。

「いーち、ぜ……」

「ま、愛美……さん……」

絞り出すような声が聞こえ、部屋が一瞬しんと静まり返った。それはとても弱弱しく、友香梨が憔悴していることは容易に想像できた。

ほんの僅かな静寂に続き瑠恵好が声を発する。

「まなみっちが答えでいいの？ほんとにそれでいい？今なら答え変えてもいいけど」

「……はい」

「よし！じゃあ回答締め切りました！」

瑠恵好は高らかに宣言した。

「ゆかりんの答えはくデレレレレレ……」

ご機嫌にドラムロールを口で真似る瑠恵好に回答を焦らされこめかみから冷や汗が伝う。百パーセントの自信があるわけではない。だが風圧から感じられた温かなニンニク臭は愛美のものに違いなかったし、彼女の屁にも硫黄臭は混ざっていた。正解のはずだと友香梨は自分に言い聞かせていた。

「……デン！ざんねん不正解でくす！」

「そ、そんな！」

現実には甘くはなかった。無慈悲で陽気な声が続く。

「いやーおしかったねゆかりん、半分は正解だったよ。正解はウチとまなみっち二人のオナラ！お尻くっつけて同時にこいたんだよ」

「は！？そんなのって！騙したわね溜慰好！」

信じられない言葉に愛美は驚愕するとともに憤怒した。意味がないことも忘れ抗議の声を上げる。

「おっと怒らないでよね、別に不正はしてないじゃん。あくまでまなみっちに協力してもらってだけで、ウチは一度もどっちかが”オナラするなんて言っていないよ”

「うわやべーやつだなこいつ」

「お前ほんといやらしいヤツだよな、詐欺師にでもなれば？」

「えへへへ、詐欺師は褒めすぎだよまなみっち」

「褒めてねえよバカ」

「ぐう……ううう！」

悔しさと、少しでも彼女達を信用した自分の情けなさが彼女を唸らせた。

彼女たちが友香梨に正解させえるはずがなかったのである。考えればわかることだった。結局は弄ばれただけだったのである。目の前が真っ暗になるような絶望に吞まれ、換気孔から差し込む淡くとも唯一の光さえ暗闇に侵されてゆくような錯覚に陥った。だがそれが錯覚ではないと気付いたのは溜慰好が再び口を開いてからだった。

「それじゃ罰ゲームの意味も込めての再開だね。なんか今



イイ感じにお腹ぎゆるるって鳴ったから凄いのでもかね、えへへ」

瑠慰好の呼吸が速まる。肛門が腸内ガスに圧迫されヒクヒクと脈を打ちそれに合わせるかのように心拍数が上昇する。目を細め放屁の快楽と共に、絶望に打ちのめされた友香梨がさらに絶望する瞬間を想像し身悶えた。既に濡れている秘所をさらに刺激しながら、彼女は門を解放した。

**ばずっ！ぶばおおお！**

「ぐはあっ！あぁう！」

喉が裂けんばかりの声が鼓膜を通し全身を震わせる。瑠慰好は新たに覚えた快楽の虜になっていた。自分を慰める指とガス排出は止まらない。

「**ヴォエエ！ぐっさああ！あがああ！**」

「い、いいよゆかりん……その豚みたいな喘ぎ最高だよ……！」

友香梨の叫びを耳で、漏れ出てくる自らの腐敗ガスを鼻で取り込みながら善がる。眼は溶けたように宙を見つめ、口はだらしなく開き涎が溢れるのも構わずに激しく空気を出し入れする。

頭がふやけそうになる中とうとう絶頂を迎える時が来る。瑠慰好はそれと同時に最後の一発をくれてやることをはな

から決めていた。

「そ、それじゃ、ハア……んぐ！っはあ……これでおしま  
いだよ、ゆかりん……むんっ！」

ぶお おおお！

「やああ！！いやああ！！！」

「はうっ！……んあ……はうう……」

お手本のような爆音の屁。肛門がじりじりと熱くなっている。それを放つと同時に溜慰好はビクンと痙攣し快樂の一つの到達点に達する。体力消費が激しかったためかそのままペタリとその場に膝をついてしまった。

「おい！大丈夫かよ溜慰好！？」

「えへへ……まなみっちい、これサイッコウに気持ちいい  
よあ……」

「アハハハ、そりゃよかったな」

情けない顔でにやける溜慰好に笑いかける愛美。彼女を始めこの場には溜慰好を軽蔑する者は誰一人いなかった。溜慰好もそれを分かってて出来たことだ。

「ル、ルイズ、だ、だいじょぶか……」

「いやお前の方が大丈夫かよ……」

ただ香夏に関しては軽蔑こそしないものの見かけによらないウブさが存分に発揮されたのか、溜慰好のオナニーを目

の当たりにして顔が真っ赤になっていた。今にも湯気が立ち上りそうだ。

「つていつかくっせ！錫早くケツで塞いでくれ！この臭いマジやべーぞ！」

溜慰好がへたり込んだ後溜まっていた内容物がどんどん漏れ始める。愛美はロッカー周辺の空気が蜃気楼のように歪んでいるようにも錯覚した。

「ラジャ」

言うが早いかサツとポジションにつく錫。先ほどから自分もやりたくてうずうずしていたようだ。形の良い臀部がロッカーにぴたりと張り付くと、無機質な温度が背中を伝い、錫は一度小さく身震いした。

「もう始めるけど、遺言は？」

彼女なりのジョークのようだったが、周囲には全くそうは聞こえなかった。

「いやだよお！ヴェー！」がら出じでえ！ゲッホオ！グス、死にだくな、おべっ！うう……」

「ハハハ！ガキのただっこみてえだな」

ひっきりなしに聞こえる粘つくような鼻水をすすする音を耳にしながら愛美と香夏が嘲笑う。まるで小さな子供の様に振る舞うさまは中に居る者の限界を示していた。

「そう、それじゃ死んで」

あくまで平坦なその声であるが、そこには一切の慈悲のない冷たさと、今から始まる処刑に胸を躍らせているような熱が併存していた。

次の瞬間に、錫の口から少し色めいた「んっ」という声が小さく漏れた。湿り気を帯びた彼女の小さな蕾がめりめり膨張し、禁断の花弁はぽつと小さく花開いた。

**ぼすっ！フスウウウウ！**

静かだが堰を切ったような勢いで溢れだしたそれは、悪意のあるスカシだった。臭いことにフォーカスされた殺意に溢れた気体が、狭い箱の隅で渦を巻き対流し、どろどろに淀んだ空気を巻き込み混ざり合い、友香梨を瞬時に丸呑みにした。

**「ぎゃああああ！！！ぐっざああああ！！！ぐぎいい！！！」**

それはまさに絶叫だった。愛美達にとってはこれまでの集大成ともいうべき混合気体が鼻腔と口腔に侵入した瞬間、生命を脅かす毒と判断した身体は拒絶反応を示し激しく暴れる。各所に打撲ができて最もそんなことは感情の外側にあった。

臭いという言葉だけでは表現しきれない。悪臭という字面では生易しい。そんなものが自身の内側を這いずり崩壊させ

ていく。鼻水や涎にも臭いが染みつき、自分自身が臭かった。叫ぶ度に彼女達の臭いに染まり彼女達の味に漬けられる。現状の苦痛に脳の処理が追い付かない。友香梨は発狂寸前の状態になっていた。

「フフ、まだまだ、おかわりあげる」

ブシュウウウ！すかああああ……

「おおえっ！げぼっ！がはっ！んはあっ！」

この空間にいる間は休まる時など微塵もない。だがそれ以上に慈悲というものを持ち合わせない錫は自身の体内で生成された極上の毒を流し込み続ける。その毒性を誇りながら。

今まで必死に我慢し続けていたが、破壊力が桁違いになった臭いは耐える時間さえ与えてくれず、友香梨は勢い任せに胃の内容物をぶちまけた。制服や下着にぬめりとした液体が染み込んでいく。さらに吐いた瞬間、糸がきれたように友香梨の理性や正気はぶつとりと切れてしまい、脳が身体の制御を放棄すると、彼女の陰部から汚水が漏れ出し水たまりをつくる。彼女から羞恥心などの感情が飛んでいたことは不幸中の幸いかもしれない。

饅えた臭いの吐しゃ物と生臭い尿、皮肉なことに自ら排出したその液体にもガスが溶け混み惨たらしいほどにカオスな臭いを作り出していた。

「いやあああああ……！殺してええ……！」

おおおお……！！！！」

意識などとうに半分以上飛んでいるが、体の底から湧き上がる本能が言葉としての形を成して体外へ排出される。その声は本当にあの友香梨のものとは思えなかった。さすがの一同もその迫真の叫びに戦慄する。当の錫以外は。

「そんなに言うなら死ぬまでやってもいいよ」

錫の顔には狂気ともいえる笑顔が浮かんでいる。猟奇的なまでの加虐思考。今回のことで自分の本質に初めて気づかされた。戸惑いはあった。だがそれは直ぐに歓喜の内側へと鳴りを潜める。本当の自分を見つけられたこと、それを他人が今認知していること、そして真に悦べる快樂を見つけたことへの歓喜だ。彼女の起伏の薄い表情からは読み取りにくいが、感情の責めぎあいが確かに存在した。

「おい、さすがにやばいかも分かんねーぞ」

「んーまあ確かにすごいけどダイジヨブじゃない？さすがにオナラじゃ死なないっしょ。それにさ………」

「それに？」

「あんな楽しそうなすずっち初めて見るし、ウチも気持ちいいの分かるからやらせてあげたいなーってさ」

「まあ確かにあんな顔初めてだな」

愛美と瑠慰好は新鮮な錫の顔に見入る。そんな楽しそうな錫を見ていると友香梨の状況など小さく思えてきていた。他者から見ればこの状況、この者たちは完全に壊れているのであろうが、彼女たちにとってはこれこそが真の自分であった。

むしゅううう、ぷすっ！

「うん……まだ出る……」

錫のガスは止まることを知らないようだった。出しても出してもその威力も量も底を見せない。

「あいつどんだけ出るんだよ」

「家庭用のガスに今度分けてもらおっか」

「引火するよりガス漏れ自体の方が危険そうだな」

「お前らな……」

そんなことを言ってケラケラ笑う愛美と瑠慰好を香夏は呆れた目で見ていた。どうやら自分は今までワルぶっていたが、「こいつらこそ本当の悪なのかもしれない」と彼女は思った。

「ああ……げふっ！あ……う……」

気づけばロッカー内から聞こえる声がほとんどなくなり、

暴れる音も聞こえなくなってきた。

「あれ、大丈夫かなこれ？そろそろ辞めさせないと後遺症とか残ったらマズくね？」

「すずっちのオナラだからその危険は十分にありうる」  
瑠慰好は神妙な面持ちで腕を組んでうんうんと頷いた。

「だよな、おい！錫！」

「なに！」

声を掛けた愛美を思わず睨みつける錫。愛美はビクツと肩を震わせた。

「あ、ごめん」

「く、お前にメンチ切られてビビるとは……」

「夢中だったからつい、ごめん」

錫は我に返って申し訳なさそうに謝った。ここまで感情が昂ったことがなく、精神の制御ができていないことに気づく。

「氣にしておねーよ、それよりも限界っぽいからさ、終われるか？」

「ん、わかった。最後に一回」

錫は精神を集中し腹部に力を込める。**ぎゅぽぽ**という音のあとに肛門がひくつく。何度味わっても最高の感覚だった。

**ぶびゅうう！ぶぱっ！ぷしいいいい……**

放たれた渾身の一発は今までより汚らしく湿った音が混



じり、音だけでも臭いそうなものだった。実際最後が一番強烈だったのか、すでに力尽きていると思われた友香梨がまた小さく叫び、ガン！と叩くような音が響く。だがそれっきり何も聞こえなくなった。

「フウ、終わり」

錫が尻を離し、同じ体勢で凝った体をほぐすためその場で伸びをしてプルプルと震えた。同時に例のごとく溜め込まれたガスが解放されて**ムワツ**と立ち昇る。

「うわっ！みんな鼻塞げ！」

いち早く愛美が警告を発する。彼女たちは窓が開いているということもあるが、ロッカーに収まらなかった分の漏れ出していたガスに多少は慣れていた。が、錫の臭いが濃くなる話は別である。皆それぞれ警戒する中、錫だけが平気でいた。

「ぶえ！開けんぞ！皆離れてろ」

「私が開ける？」

「いや、アタシが開けたい。錫はこいつが倒れてきたら支えてくれ」

「ラジャ」

愛美が顔をしかめながらまず手前の簡素な土台を避けると、扉に手を掛ける。まるで本物のシールドストレミングを

扱う時のような慎重さになっていた。

「いよいよ人間シニールストレミングのお披露目だな、いくぞ！せーのっ！」

掛け声とともに勢いよく扉を開ける。愛美は瞬時にその場を離れる。開けた瞬間に周囲の空気が黄土色に変化した気がした。あの錫の表情が一瞬曇るのを目にし、愛美は生唾を飲んだ。

中から友香梨がどつと倒れてくる。錫はそれをすかさずキャッチした。うつむいて髪が垂れ下がっており表情は窺えないが、意識が無いように見えた。

「おい、もう大丈夫か？」

「……多分、臭いは散ったと思う」

錫がスンスンと鼻を鳴らす。しばらく物陰から様子を窺っていた愛美達がぞろぞろとやってきて、おそろおそろ鼻呼吸をし始めた。

「んっ！まだなんか臭うよ」

「そう？」

「オレ達とスズで感覚が違うの忘れてたわ……」

多少臭いは残留していたようだが、ともかく耐えられるレベルにはなったようである。ここで錫以外の者は初めて友香梨の状態を確認した。

「うう……くさあ……くさ……い……たすけて……」

それは目も当てられないような悲惨な状態であった。目はほとんど白目をむき、顔の筋肉が弛緩し口は開かれて涎が漏れ出ている。鼻水と涙も加わり顔をぐちゃぐちゃに濡らす。手指はピクピク痙攣し暴れたため服は乱れ汗と吐瀉物と尿でびしょ濡れに。髪の毛もぼさぼさに荒れている。そんな状態でうわ言を繰り返していた。

「おーいい仕上がりじゃん」

そんな彼女を見て愛美達は満足感に包まれていた。もはや彼女らは常識の外側に立っていたのだ。

「それにしてもここからでも凄い臭うね」

瑠慰好がニヤつきながら言った。

友香梨の身体からは顔を近づけようものなら瞬時に吐き気を催す程の臭気が漂っていた。当初の思惑通りにだ。その事實は彼女たちに大きな達成感を与えた。

「これは風呂入ってもなかなか落ちねーだろうな」

「目が覚めてもしばらく鼻の中くっさいだろうねー」

「へへへ、ざまーねーなオイ、オレらに楯突くからだよ」  
自分から耐えがたい悪臭がする。しかもここまでの臭いは、嗅覚が敏感な友香梨でなくとも耐えがたいはずだ。人前にも容易に出られないだろう。

「んで愛美よお、こいつどーすんだこれ」

「んー考えてなかった」

「はあ!？」

「だってこれが目的だったしなあ」

「でもほっとくのは流石にマズくね? いやこいつはどーでもいいけど先公とかに見つかったらめんどいじゃん」

「んーそうだよなー」

「お前真面目に考えてんのかよ……」

愛美は顔をしかめて今更考える素振りを見せたが、充足感に浸っていたので実際は上の空である。だが確かに何もせずこのまま放置するというわけにはいかないだろう。いつ起きるのかも分からないうえ、誰かに見つかったり報告されても面倒だ。

「そんじゃーさー、家まで届けてあげれば一番安全じゃない? 場所はウチ知ってるし」

「なる。でもこいつんちどこよ、運ぶのだるいぞ」

「つーかこんなくっせーの運ぶのオレはごめんだからな!」

「家は遠くないんだけど臭いは確かに嫌だよね、とゆーわけであ」

瑠慰好はくるりと回り背後にいた錫に満面の笑みを向け

た。

「すずっちお願い！力持ちだし臭いに強いしすずっちしかないんだよ！」

手を合わせぶりっ子のように拝む。

「任せて」

「迷いなしか！」

親指をビツと立てた錫に、いつものように愛美が突っ込んだ。あんなことをしたばかりだというのに、彼女達は笑いあっていた。既に普段通りの日常の中にいるのだ。

「でもやっぱりチクられるのはこえーな」

愛美は気だるげな眼で横たわる友香梨を見やった。

「脅迫文でもおいときや大丈夫だって」

そう言って溜慰好はノートを取り出し雑に二ページ破くと、ボールペンを使い床の上で何やら書き綴る。

書き終わると立ち上がってそれを愛美達に見せた。そこにはこれまた雑に、それでいて大胆な字で「次坂らったら殺す」と書かれていた。

「この子一回折れると引きずるタイプだし、これだけでもきつとビビりまくるよ」

「その前にお前のバカっぷりにビビってるんだけど」

「はあ？なにそれひどい！ウチが何かしましたかー！」

「逆らうでその『坂』書くヤツの頭のがひでーよ」

「え？これ違うの？なんか坂って上りにくくて抵抗ある感じだからこれで合ってると思った」

瑠慰好が心底驚いたような顔で言うので愛美は呆れて苦笑いする。そのすぐ横では香夏が妙に神妙な面持ちで口を開いた。

「オレもその字だと思ってたんだけど……」

「お前ら……奇跡のバカだな」

流石に愛美も頭痛がしてきたようだった。ガスのせいだろうか。

「ま、いいやアタシが書き直すよ」

そう言って今度は愛美が同じ文面を破ったノートに書く。瑠慰好達にはああ言ったが、彼女も国語が得意なわけではない。脅し文句を考えるのは面倒だったようだ

書き終わると、友香梨のバッグの脇のポケットに分かりやすいように差し込んだ。

「こんなんでいいかな」

「待って」

「どした錫」

錫はつかつかと寄ってくると、おもむろにバッグを開き尻を突っ込んだ。

ブブウウ！

そのまま急に放屁した錫に、近くにいた愛美は慌てて鼻を摘まんだ。

「ちょ！何してんだよ！」

「出そうだったからついでに」

錫はこともなげに答えた。

「あ、じゃウチもやる」

「オレも」

「なんだよお前ら揃って……あーあ、金が台無しだ」

愛美は頂戴しようと思っていた財布の中身を諦めざるを得なくなり、やや肩を落とした。別に金が破損したわけではないが誰だって錫やその他の屁塗れの物に手をつけたくはない。

「まなみっちもしよ！記念にさ！」

「いや何記念だよ馬鹿」

「ところでこれってあれかな、連れションならぬ連れっぺって言うのかな」

「知らねーよいいから早くやるぞ」

「あ、やるんだ」

なんやかんやといいつつも付き合いの良い愛美。彼女も催していたので丁度良いとは思っていたようだ。

ボスウ！ぷおお！ばふう！と、次々と汚い濁音・半濁音が友香梨のカバンに吸い込まれていく。先ほどまでのロッカーの中身を再現した形になった。

「これはゆかりんへのお土産だね、テイクアウトガス！」  
「最悪なサプライズだよな」

愛美はこれを開けた時の友香梨の顔を想像しついニヤけた。金のことも完全に許せる気分だ。

「よし、いい加減帰ろう」

「待って待って待って！もう一個！もう一個だけ記念に！」

切り上げようとする愛美を溜慰好が引き止める。手には看板製作用の画用紙を切ったと思われる紙が握られている。

「なんだよ今度は」

「写真撮ってないじゃん！みんなで記念に撮ろうよこれと一緒に！今度は間違えてないから！」

再び紙を掲げる溜慰好。そこには今度はマジックで“人間シールストレミング完成！”と書かれていた。

下の余白には日付と共に

作った人 まなみっち    ずずっち    かなっち    ルイズ    材料… ゆかりん    皆の愛情♡



という表記が大量の絵文字と共に並んでいた。しかも「愛情」には「オナラ」のルビが振ってあり、その他の余白もちやらちやらと蛍光ペンなどでデコってある。

「お前いつの間にこんな凝ったもん作っただんだ？」

「さっき！」

「その行動力はスゲーよな……」

愛美はなぜか素直に感心した。

「はやく撮っちゃお！すずっちこれ持って！」

「オレ写真って苦手なんだけどな」

「アタシも」

「えーいいじゃん撮ろうよお！ちゃんと後で画像送るからさあ」

「別にいらねーけど、ま、いいかせっかくだしな」

「そうこなくっちゃ！」

半ば強引に推し進める瑠恵好に流されるように全員が配置についた。錫は横たわる友香梨の頭側で膝をつき瑠恵好お手製のカードを自身の頭の左側に掲げる。足側には愛美が左手をポケットに右手でピースサインを、香夏はその左隣でヤンキー座りをしている。瑠恵好は手前で、用意周到なことに持参していた自撮り棒を片手にVサインを額に当ててあ

ざとく舌を出す。

「それじゃ撮るよーはいチーズ！」

これまでと打って変わって人工的な音が鳴り渡る。この一連の出来事の中で唯一女子高生らしい瞬間とも言えた。

スマホから聞こえたポップなシャッター音は、彼女達にとっては復讐劇の成功を告げる鐘のようだった。

翌日。友香梨は学校を休んだ。それが身体的ダメージなのか精神的ダメージなのか。それははっきりとしない。通告書と手土産が決定打になった可能性も考えられる。

クラス担任には体調不良だと伝えられ、詳しいことは聞かされていなかった。愛美と瑠恵好がその報せを聞いてほくそ笑んでいたことは錫以外の誰も気がつかなかった。

休日を挟んで登校日を迎えると、彼女はやってきた。

クラスメイトが声を掛け、彼女も笑顔でそれに応答した。だが自分や瑠恵好、錫に対してはチラチラと目線を送るだけで明らかに避けていることに、愛美はすぐに気づいた。また、クラスメイトにも一見いつも通りに振る舞っているようであつたが、どうにも挙動がおかしいのが見て取れた。友香梨はしきりに自分の身体を不安げな表情で何度も嗅いでいるのだ。そのうえ誰かが近寄るたびにビクつくように小さく距

離を取っている。あの時の臭いがまだ身体にこびりついていないのではないかという不安に駆られての行動に違いなかった。次第にその不審な動きに他の生徒も訝し気な目を向ける。

「よう、元氣か委員長さん」

良くも悪くも注目が集まる彼女に、三人は後ろから近づき、愛美が肩を叩くと同時に声を掛けた。

ガタン！友香梨がイスと机で耳障りな音を立てる。教室の多くの視線が一手に集まる。心臓のバクバクという音が聞こえそうな程に目を丸くして友香梨は振り向いた。

「あ、ああおはよう愛美さん！」

「こないだ休んだから心配したぞ、なんかあったのか？」

愛美は意地の悪い笑みを浮かべて聞いた。友香梨は拳を震わせ唇を一度ギュツと噛んだ。

「い、いえ、ただの風邪だったから……」

「ん？スンスン……なんか臭くねこの辺？」

「え！？そんな！いやぁ！」

友香梨は一気に青ざめて取り乱したように自分の身体を匂い始めた。これ以上なく自分の臭いに怯えている、そんな感じだった。

「いや気のせいだったわ、どうしたそんなに慌てて、心当たりでもあんの？」

「うぐ……！べ、別に……」

友香梨はぎりぎりと奥歯を噛む。涙の滲む目じりでニヤケる愛美達を睨んだ。

「あれ？ゆかりんカバン替えたの？」

今度は瑠慰好が愛美の後ろから身を乗り出して聞いてきた。もちろん変わった理由など知っているのだから、とても白々しい質問だった。

「……替えたけど、それが何」

「へえゝそつかあゝまだ使えそうだったのにねゝ」

そういうながら瑠慰好は友香梨に近づき頭を並べる。顔を背ける友香梨に対し、耳元に口を近づけた。

「ウチらがカバンに入れてあげたプレゼント、気に入ってくれた？」

「……っ！」

イスが再びけたたましい音を立てる。クラスの眼が再度向けられる。立ち上がった友香梨が瑠慰好に向けて手のひらをかざす。瑠慰好は思わず目を瞑るが頬を張る音は聞こえず、代わりに嗚咽が耳に入ってきた。見ると瑠慰好をひっぱたく筈であった右手は友香梨の口元に当てられている。

「うぶっ！おええ！」

彼女の脳内にカバンを開けた時の悪夢がフラッシュユバツ

クしていた。

「ふいゝ……べ、べつにビビってないけどねウチは！」

瑠慰好は目を引くつかせながら虚勢を張った。

「嘘つけめっちゃビビってたじゃねえか」

「ビビってない！」

「ムキになっててかわいい」

「もおすずっちまで！」

三人がふざけていると周りから何人かの女子が友香梨の元に駆け寄り心配の声を掛けている。

「ちよっと！友香梨に何したの！」

「いや知らねーよこいつが勝手にキレたんだよ」

「そーだよウチら被害者だもん、殴られそうだったんですけど」

「アンタらがなんかしようとしたからでしょ！大体——」

「いいの！えほっ！わ、私が悪かったの、大丈夫だから……」

……

友香梨は責める女子たちを息を切らせながら抑えた。

「で、でも——」

「いいから、いいから……」

「いやまあ本人もこう言ってるしさあ、アタシらも別に責める気ないからこれでオシマイってことにしようや。んじやな」

愛美はそう言うと、女子たちからの非難の目を浴びながらも得意げな顔で二人を連れて離れていった。こうまで友香梨を追い詰めることに成功したことに、内心笑いが止まらなかった。

放課後――

文化祭の準備は終盤にさしかかっていたが、相変わらず校内はお祭りムードで賑わっており、まだまだ人手が余ることは無い。そんな中、彼女たちは当然のように帰ろうとしていた。

「おい待てよ！今日も何も聞いてないぞ！やってけよ」

一人の男子生徒が呼び止める。『今日も』とは、友香梨が休んだ時にも愛美達は勝手に帰ったからだ。だが今日は友香梨がいることもあってか少し強気でいるらしく、彼女達に警告した。

「あーうるせーなこないだ手伝ったろうが」

「そ、それとこれはちがうだろ」

「そうだよ手伝ってよ！」

数名の女子生徒も輪に入ってきて「ちゃ」ちゃと言ってくるのが鬱陶しかった。

「あー、あれだから、アタシら帰って良いって許可貰ってるから」

「誰にさ」

「委員長だよ。な、友香梨？」

クラスがざわつく。驚きの声と困惑の視線が友香梨に向けられた。

「そんなの嘘でしょ？ねえ友香梨ちゃん？」

誰かが友香梨にそう聞いた。友香梨は俯き口を真一文字に結んでいる。全員が彼女の勇氣ある答えを望んでいた。

「え、えと、その……」

口ごもる友香梨が視線を上げる。多くの人影の奥に、愛美達の姿がある。朝はいつらに負けてしまった。でもそれは正しくないことだ、私は屈してはならない。あの後友香梨はそう決意した。今こそその意思を見せつけなくてはならない。だが、三人のうち、錫と目が合ってしまう。彼女はジッとこちらを見ている。こちら目も離せなくなる。そして彼女は見せつけるようにスカートの端を持ち上げた。褐色のハリのある脚がスルスルと露出していく、ふつくらとした丸みを帯びた太ももは背中側にあのおそろしい蕾があることを主

張していた。それを見せられた瞬間友香梨の方がビクン！と跳ねる。トラウマがフラッシュバックし、足が震えた。

「い、いいの！彼女たちは、もう十分やってもらったから、帰ってもらって……」

「そんな！ゆ、ゆかり！」

「いいから！皆作業に戻って！」

決意は見事に打ち砕かれた。友香梨の口から発せられたのはクラスメイトを失望させる言葉だった。この瞬間、クラスの権威は愛美達に移行したも同然だった。

「それじゃお言葉に甘えて、ありがとな委員長さん」

様々な感情の視線を受けながら愛美達は教室を後にした。

「クフフ、やったね！見た？あのゆかりんと皆の顔」

「最高だったな、ナイスプレーだぞ錫」

「いい気味」

錫はフンスと鼻を鳴らす。彼女たちはとても心地よい気分浸っていた。まるで自分たちが特別な存在であるような。

愛美達は他学年の視線をちらほら浴びつつ玄関を抜け、校門でしばらく駄弁っていた。

「おう！待たせたな」

そんな中香夏が駆けよってきた。彼女も抜け出してきたのだ。4人は一応校門で待ち合わせていたのだが、香夏が



来たのは愛美達のずっと後だった

「お前遅かったじゃん」

「あのなあ、オレはお前たちと違ってクラスじゃ大人しくしてっから抜け出すの大変なんだぞ！」

確かに香夏の場合副担任を脅すわけにもいかない。なんとか忍びつつ、生徒であれば時に脅しつつ抜けなければならぬのだ。

「わかったわかった、早く行こうぜ」

彼女たちは街中へと歩を進める。もう止めるものは存在しなかった。

「なんかさあ、ウチらってもう相当な不良って感じだよね」

「なんだよ急に」

「いやあほら、今回のことでウチも本当にワルになっちゃったけど、自由でいいなって」

「お、ルイズも不良の良さが分かったか？」

香夏が茶化して、溜慰好も笑った。

「錫はどうだったよ、こういうことして」

愛美が横目で錫に投げかける。

「うん、悪くない」

「そうか、そりゃ良かった」

「おーオメーいいじゃんそうこなくっちゃよ」

香夏は心底嬉しそうだった。

「実際ウチらが協力すれば学校牛耳れそうだよね、なんて」

「いや、案外そうかもなあ教師は別としてもよ」

瑠慰好が冗談交じりにそう言ったが、愛美はそこそ本氣だったらしい。

「そうだよ、ナマ言うやつらがいたらぶっ飛ばして、いやぶっ放してやりやいいんだから」

香夏が愛美の尻をポんと叩く。愛美はうおっ！と声を上げ香夏を小突き返した。

「あのさ、ウチまたあれやりたいんだけど」

しばらく笑いあっていた4人だが、瑠慰好のこの言葉で一瞬静まった。

「え、あ、ごめんウチ冗談でー」

「実はアタシも、もっかいやつてもいいかなって……」

愛美は頬を掻いた。

「お、オレも実は、あれクセになっちまって……」

香夏は後頭部をさすった。

「私も、何回でも」

錫はいつも通りの真顔で堂々と言った。

「それじゃ、皆やりたいんだ……」

瑠慰好は少し意外そうに驚いたが、すぐ歡喜の表情に変わ

った。

「よし！じゃあやろうよ！皆でもういっかい！」

「ああそうだな！あ、でもターゲットどうすっかな」

「それならオレいいヤツ何人か知ってるぜ」

「流石顔の広い不良娘だな」

「それ褒めてんのか？まあいいけど。でもそいつ別に鼻良かったりしねーぞ」

「大丈夫だよ、こっちには錫がいるんだから」

「うむ、腹が鳴る」

「鳴るのは腕……いやこの場合いいのか」

「よーし今度はすずっちにも負けないようにするぞー！」

「十年早い」

「えー、なんだよそれー」

「ハハハ、それで香夏、そいつはどこの誰なんだ？」

「ああ、そいつはー」

この後、愛美達のクラスにおいての桜庭友香梨の影響力は落ち、実質愛美達がカーストの上位となった。そして彼女たちは自らの快樂のために、校内中に犠牲者を増やしていくことになる。数々の地獄が生まれ、多くの者がトラウマを抱える。しばらくすると彼女たちに逆らえる者がいなくなってい

た。実質学校を支配するまでに至ることとなり、地域でもある意味で最強の不良集団と恐れられるのは先の話である。

終